

---

# 小悪魔和葉ちゃん

千颯

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

小悪魔和葉ちゃん

### 【Nコード】

N8538V

### 【作者名】

千颯

### 【あらすじ】

オレと和葉はやつと付き合うようになった。でも、和葉が変わってしまって・・・ちょっとHで小悪魔な和葉ちゃんに振り回される平次の恋物語。

『平和な週末』に投稿していたのを、独立させました！

## はじまり(前書き)

小悪魔和葉ちゃん、誕生！

## はじまり

二ヶ月前、オレと和葉は想いが通じ合い、結ばれた。

初めての時、和葉は小さく震えながら

「やさしうしてな。平次……。」  
そう囁いた。

オレは、折れそうな細い肩をそっと抱きしめ、壊れ物を扱つように抱いた。

すべてが終わった時、和葉は泣いていた。

それから、二ヶ月……

オレ達、何があつたんや？

オレ、何か間違えたんやろうか？

なあ、和葉教えてくれや……。

オレは和葉がわからない。

「へえじ」

和葉がにっこり笑う。

その笑顔の下に、何か隠されているのはわかっているのに、この笑

顔にオレは逆らえない。

和葉に囚われてしまったオレは、和葉から離れられない。

なあ、和葉、オレはどうすればいいんや？

・・・教えてくれ・・・

## はじまり(後書き)

シリアス風ですが、ギャグです。(微妙にエロ?)

## お仕置き(前書き)

ちよいかわいい平次をお楽しみ下さい。

## お仕置き

「何や、和葉。お前、ぶっさいくな面やな〜」

「生まれつきや！この、どアホウ！」

和葉とのど突き合い。

それはオレ達のいつもの光景。

「……なんやけど……」

2人つきりになると……

「ねえ、さっきの言い方なんなん？」

「いや、その……」

「ふーん、やつぱ、体で覚えさせんとわからんのやな？」

「……あ、いや……ちよっ……やめっ、あっ」

「アンタ、やらしいの〜」

「……あっ……やめろっつてっ」

「やめる言われて、やめる人なんて、おら入んて。」

「……あっ、やばいって、そこは……」

「感じてんのや。やつぱ、やらし〜」

「あつ、もう……優しくして……お願いだから……和葉あ。」

何で、こうなつたんやろ？

服を脱がされながら、ぼんやり考える。

二ヶ月前、想いが通じ合つて、抱き合つた時は

「優しくしてな。平次」って可愛い顔と声でお願いされたのに……。

今、オレの前にいるのは、オレに悪戯して可愛く笑う和葉……。

オレの小悪魔様。

どこでオレは間違つた？

……でも、嫌やない、オレが一番やばい……

オレは小悪魔様の悪戯に溺れていった。

お仕置き(後書き)

いじられ平ちゃんです。今まで書いた平次の中で一番気に入っています(笑)

## 嫉妬

「・・・もう、和葉やめてえな・・・。」

「何で？」

にっこり微笑むオレの小悪魔様。

「・・・もうしんどいねん・・・。」

「アンタへの告白シーンを、目の前で見せられたアタシの方が、よっぽどしんどかったで？」

「・・・オレのせいじゃないやないか！」

「アンタのせいじゃなかったら、誰のせいなん！」

かぷっ。耳たぶを噛まれた。

「あっつ。」

「何やのん。アンタ。何やかんや言つて、悦んでんやないの。」

・・・確かにそうかもしれんですけど！この生殺し状態は本当にしんどいねん！

和葉のきれいな唇がやけに目に入る。

「もうっ・・・。」

(もう限界)

そう言いかけたとき、顎をくいっと掴まれ、ぺろっとなを舐められた。

その舌の感触に、全身が総毛立つ。

思わず開けたままにしていた口の中に、和葉の細くて柔らかい舌が侵入してきた。

「……………くっふっ……………」

女みたいな声が出る。

それを面白がって、和葉がオレの感じるところを執拗に責めてくる。

「はあっ。うー……………和葉あ。」

オレはきつと涙目や。

「なあに？」

「もう、これほどいてえな？」  
後ろ手に縛られた手を動かす。

和葉はそんなオレを見て、にっこり微笑むと

「イ・ヤ!」

きっぱり言って、オレの首筋に唇を当てた。

「……………くっ。」

和葉はにっこり笑いながら、オレを責め続ける。

(今日は、いつもより長くなりそうや……………ひーっ)

オレはこれからまだ続くであろう生殺しプレイを想像して、気が遠  
くなつた。

・・・でも、ほんまに嫌やないねん！大丈夫か・・・オレ・・・

目の前では、キレイで艶な小悪魔様が笑っていた・・・。

嫉妬（後書き）

平ちゃん、実は楽しんでます。

## 工藤知る(前書き)

工藤と平次の会話です。工藤と和葉の絡みはありません。あしからず。。。。

## 工藤知る

「でさ、蘭が気絶しちゃって。」  
「……へー。」

服部と2人で酒を飲みながら話す、彼女のエロ話。

でも、何となく服部のノリが悪い。

「……何だよ、お前……まさか、和葉ちゃんとはやってないのか？」

「……やっとなるわ。」

「ふーん。何かノリ悪いよな。」

「そんなこと、ないで？」

「あ！お前、テクがいまいちで、和葉ちゃんが不満足とか？」

「アホなこといいなや！オレがする時は、ちゃんと気持ちよっさせとるわっ！」

……今、なんか変な事言わなかったか？こいつ……

「……『オレがする時は』って、……どういう意味なんだよ？」

「……」

「服部くん？」

「……黙秘権や。」

……ほー、オレ相手に黙秘権ね。

「・・・和葉ちゃんに、電話して聞こうかな?」  
「やめっ。まじで、それやめてえな!話す!話すから。」

.....

「で?・・・お前、和葉ちゃんにも責められてんのかよ?」

コクン。素直に頷く服部。

「それってどうなんだ?」

「どうって、何がや?」

「いいのか、それ?」

ちょっと興味あるじゃないか!気持ちいいのかよ!

・・・コクン。服部は頷いた。

「そっかー、いいのか・・・。」

「でも、こつちもちゃんとするで?」

「・・・そんなのどうでもいいよ。へえーいいのか。何かすげーな  
それ。」

オレの妄想はどんどん膨らむ。

「・・・蘭もやってくんねえかな・・・。」

「やめとけ・・・抜け出せんくなるぞ・・・。」

真剣な顔で服部に諫められ、オレは思わず頷いた。

でもでも・・・

「見てみてえ・・・。」

「・・・殺すぞ、工藤・・・。」

服部から殺人ビームが飛んできた。

・・・それでも、見たい。

オレの好奇心がむくむくと鎌首を上げた。

## 工藤知る（後書き）

工藤と平次の会話。コクンと頷く平次を想像してください。かわいいでしょ？

## 覗き見（前書き）

『工藤知る』の続きです。

## 覗き見

「アンタ、工藤君に何言ったん？」

「な、何も、言つてないつて。ほ、ほんまやつて、和葉。」

服部が必死で言い訳をしている。

昨夜服部から衝撃の告白を受け（和葉ちゃんがエロ小悪魔ってね）、無意識にオレは和葉ちゃんをガン見していたらしく……

……そしたら、勘付かれた？みたいな……。あはははは……

今、オレの家のゲストルームで、服部が和葉ちゃんに尋問されている。

（……許せ……服部）

そう心の中で謝りつつ、好奇心には勝てず、オレはドアの隙間から2人の様子を覗いていた。

こっちからは、和葉ちゃんの顔しか見えない。

「ほんまやつて。和葉。信じろや。」

ソファーに腰掛け、前のめりになって言い訳する服部と、腕と足を組んで、黙って服部を見据える和葉ちゃん。

かたん。和葉ちゃんがふいに立ち上がった。

「・・・かずは？」

とっさに見上げた服部の顎を、くいつと掴む。

「・・・そうよな？アンタのあんなやらしいとこ、いつくら工藤君でも言えんよな。」

「・・・」

「それとも、何？お仕置きされたくて、そんなこと言いふらかしてるの？」

「・・・ちがつ。」

和葉ちゃんが服部の耳元に口元を寄せ、何やら囁いた。

びくんっ。服部の体が揺れる。

そのまま、和葉ちゃんの唇が、服部の耳たぶを噛み、首筋におりていき・・・

それを食い入るように見ていたオレは、腰を抜かしそうになった。

(・・・和葉ちゃん、オレに気付いてて楽しんでる・・・)

・・・和葉ちゃんはこっちを見て、口の端を上げて妖艶に微笑んでいた。

服部の体は相変わらず、びくびく反応している。

（・・・そりゃ、抜けせんわな・・・頑張れ、服部）

オレは、親友にこっそりエールを送った。

でもでも・・・

オレも蘭にやってもらいてえー

覗き見（後書き）

蘭ちゃんには、似合わんだろうよ・・・工藤君。

アリ地獄(前書き)

工藤編、最終話です。

## アリ地獄

ひっくひっくひっく

「……泣くなよ、服部……」

『ほな、工藤君、アタシ蘭ちゃんと買い物行ってくるから、平次の事、頼むな。』

そう爽やかに言っつて、和葉ちゃんが出かけたのは、10分前。

そして、応接室のソファで泣き崩れる男が一人……

「なあ、服部。機嫌直せつて。」

「……お前のせいじゃないかっ！お前が、お前が和葉に勘付かれるから……」

「だあっ！悪かったつて。謝ってるじゃねえかよ。それに、お前も気持ち良さそうだったじゃないか。」

「……」

……あ、やべ。

服部がゆらりと起き上がった。

「……『気持ち良さそう』？って何でお前が知つとんのや！」

「いや、その……。」

「お前、覗いとつたな！」

「ああ、ま、つい、その……。」

「あつ……。」

『声出すと、工藤君に気付かれるで？ええん？へ・え・じ？』

「……和葉も気付いとつたんやな……。」

「あ、うん。そうみたいだな。(目あつたし)」

どさっ

服部がまたソファーに突っ伏した。

「オレ、もうイヤや〜。」

「(いやいや言いながら、悦んでたじゃねえかよ……) そんなに嫌なのかよ？」

「……オレは男や！オレだって、和葉をひーひー言わせて、喜ぶたいねん！」

「あれ？お前がする時もあるんだろ？だったら、いいじゃねえか。」

「……それが、もう、そんだけじゃ、物足りんねん！」

「はっ？」

「和葉に弄られんと物足りんねん！弄られてイヤじゃない自分が嫌やねん！」

「……そいつは、複雑だな……。」

「いやや〜。前のオレに戻りたい〜。」

えぐえぐえぐ

服部がまた泣き出した。

(・・・鬱陶しいヤツ・・・)

「ま、アレだ。とりあえず、シャワー浴びてこい。な？冷たいシャワー浴びたら、何かいい案浮かぶんじゃないか？」

コクン

素直に服部は頷くと、ふら〜と立ち上がった。

「・・・だ、大丈夫か？服部？」

「コレが大丈夫に見えるんやったら、お前眼科いけや・・・。」  
力なくそういうと、服部は浴室に消えていった。

(やりすぎだぜ、和葉ちゃん・・・)

オレは和葉ちゃんあの妖艶な微笑を思い出した。

「頑張れ、服部・・・。」

・・・多分、もう抜け出せないんだろうけどな・・・。

オレはふっとため息をついた。



アリ地獄（後書き）

二度と抜け出せねえ・・・頑張れ！平次！

**本能（前書き）**

本能に忠実なオレ、平次！

## 本能

「服部先輩!」

後ろから突然声をかけられた。

「何や?」

振り向くとそこには、年下らしい女が……。嫌な予感がする……。

「ずっと好きでした!コレ、受け取ってください!」

やっぱり……。

「あ、いや、オレ、和葉おるから……ごめんな。」

「遠山先輩と付き合ってるのは知っています。でも、受け取ってください。」

女は、自分の言いたい事だけ言って、

むぎゅ

プレゼントを押し付けて、去っていった。

( 困るっちゅうねん! )

きよろきよろきよろきよろ

慌てて周りを見回す。

(・・・良かった・・・和葉には見られなかった・・・)

急いで、ロッカーにブツを押し込む。

「へ・え・じ」

「・・・ひいひいひい。」

突然聞こえた、オレの愛おしい彼女の声。

「何なん？人のことおばけみたいに。」

「あ、いや、ちょびっくりして。」

「そっなん？」

よかった。機嫌は悪くなさそうや。  
さっきのは見られてないみたいやな。

内心びくびくしながら、和葉の顔を伺う。

和葉はにこにこして立っている。

「どうしたん？和葉。えらいご機嫌やな？」

オレの問いに、和葉はまたにっこり笑うと、すっと手を伸ばして、  
オレの腕をつーっとなぞった。  
オレの腕はぶわっと栗立つ。

「な、な、な、何か、和葉ちゃん？」

「いや、別に。そういえば、アンタ、午後から水泳やんな？」

「そ、そやったかな？」

「楽しみやなく水泳。」

またつーつと腕をなぞる。

今度は背筋がぞくぞくしてきた。

何か、不安や期待で、下半身の怪しい場所に血が一気に集中しそっ  
や……。

そんなオレを満足そうに見て、和葉はすっと近寄ってくると、耳元  
でこそつと囁いた。

「部室で待つとるから。」

ひひひひひひひひ。

やっぱりさっきの知られてたんやな！

「……あ、いや、オレ……」

「いやならこんで、ええんやで？」

口の端を上げてにつこり笑う和葉。

「……いや、行かせて頂きます。（色んな意味で……）」

「そっ？ほな、待ってるから。」

ちろつと流し目をくれて、和葉は去っていった。

あつううう。

今日は、何されんやろ？この前のもきつかったけど、よかったよな・  
・・。

がああああ。

何期待しとんねん！オレ！

嫌がれ！オレ！

はあああ。無理や。

素直な本能にため息をつきながら、オレはいそいそと部屋に向かった。

本能（後書き）

いそいそと向かう平次がかわいくて・・・

## ピンクのオニ（前書き）

『本能』の続き。いそいそ出向いた先では、ピンク色の……

## ピンクのオニ

「くっ……ふっ」

「なあん？平次？」

「あつ。和葉もう。オレ……。」

「ま・あ・だ！だめ！」

「……さつきから、そればっかやないか！オレ、もう、きつうて……」

くいつ。

顎を掴まれる。

和葉の猫のような大きな目から、目が離せない。

「きつうて、なあに？」

「き、きつうて……なあ、もう、抱かせて？」

「だ・あ・め！」

「えっ？何でなんっ？」

「何でつて……アンタ、学校でそんなやらしいことする気なん？」

「……いやいやいや。アナタの方が相当やらしいことしてますから。」

「ちよお、待て！ほいじゃ、この状態で、放課後まで我慢せいつち  
ゆうんかい！」

「うん。」

にっこり笑う和葉。

「鬼や……アンタ、鬼や。」

わめくオレをみて、うふふふ。和葉が楽しそうに笑う。

「そやな。あんまひどいな。じゃあ、自分でやって？」

「な、な&%\$&%\$#」

「見ててあげるから。ほら。」

あわわわわわわ。

「オニーーーーー！」

オレの小悪魔様は、それはそれはキレイにお笑いになった……。

……数分後

ひっくひっくひっく

泣きじゃくるオレ。

「よう我慢したなあ。平次。」

頭を撫でられる。

えぐえぐえぐえぐ

「ご褒美あげるわ。」

そう言って和葉は艶やかに笑うと、オレの首筋に唇をあてた。

チクッ

痛痒い快感が突き抜ける。

チクツ・・・ちゅっ・・・ちゅぱ

(ああっ！あああああ・・・いっ・・・)

・・・じゃないっちゅうねん！何のためさっき我慢したと思っ  
てんねん！

「やめいっ！」

「何が？」

「次、水泳言ったの、和葉やないか！コレ、お前がつけたってばれ  
るで？」

にっこり

和葉様は微笑む

「アタシは全然平気！むしろ、アタシのって名前書きたいくらいや  
で。」

「ほっかー。」

愛されてるなあ・・・オレ。

「って、和葉、コレ、どこ触ってんねん！オレ、もう、プール行か  
な、間に合わんって。」

「シャワー浴びれば落ち着くやろ？」

・・・そりゃそうやな。

「って、違〜う！男同士で着替えてて、この状態やったら、オレ、ただの危ないヤツやん！」

「そういつ噂が立った方が、むしろアタシは好都合！」

「や〜め〜て〜」

オレは本気で泣きが入った。

それを見て、心から楽しそうに笑う小悪魔和葉。

「もう、勘弁してえな。」

「そやね。今日のごは、コレでやめとくわ。そのかわり……  
くいとオレの顎を掴む。

「今日水泳さぼったら、ひどいで？」

「……あい。」

ふふふ。和葉は笑うと、ちゅっ オレに軽くキスをした。

やっと和葉に解放されたオレは、更衣室に急ぐ。

（……さぼったら、ひどいって……何されるんやろ？アレか？  
コレか？）

頭に浮かぶのはピンク色の妄想……

だああああ。何考えてんねん！さぼったら、あかんっちゅうねん！

でも、頭を占めるのはピンク色のアレやコレや……。

「もうイヤや〜」。

オレの絶叫が校舎に木霊した・・・。

・・・でも、これが本当は幸せやったんやと気がついたのは、この  
一カ月後のことやった・・・。

ピンクのオニ（後書き）

第二部へ突入！

## 異変（前書き）

第二章の始まりです。

## 異変

オレの名前は服部平次！  
西の高校生探偵や！

オレにかかれば、どんな難事件もすぐに解決！  
向かうところ敵なし！

・・・と言いたいところやけど、人生そううまくはいかず。  
オレの弱点というか、泣き所というのが・・・

「へ・え・じ」

あう・・・

オレの幼馴染で、最愛の彼女、遠山和葉。

オレは、この小悪魔和葉に翻弄される日々を送っている。

でも、嫌だけど、嫌じゃない・・・  
あうっつう。

誰かオレを助けてやあ

） 小悪魔和葉ちゃん 異変編 （

あふっ

(・・・昨日も激しかったな・・・)

欠伸をしながら、廊下を歩く。

(和葉のヤツ、人のこと好き勝手しよって・・・)

ピンク色の映像を思い浮かべていたオレは、前から来ていた女生徒に気がつくのが遅れてしまった。

「きゃっ」

「あ、すまん！」

女は廊下に尻餅をついている。

(・・・白か・・・)

清純そうなこの女にふさわしく、白のレースの下着がちらっと見えた。

「大丈夫か？」

手を差し出すと、真っ赤になってスカートの裾を整えながら、おずおずと手を伸ばしてきた。

「ありがとうございました。」

「いや、オレもぼーっとしとったし。すまんかったな。」

「いえ、うちも前よく見てなくて・・・それじゃ。」

「おう。」

女は顔を真っ赤にして去っていった。

ふっん。本当清純そうな子やったなあ。

何かああいう子もええなあ。たまには。

和葉が濃いブランデーなら、爽やかな清涼飲料水みたいな・・・

そうぼんやり考えながら、後ろ姿を眺めていると、

「平次」

後ろから声をかけられた。

「か、和葉。」

「何しとん？」

「い、いや、べ、別に。」

「ふん。」

「か、和葉こそどうしたん？」

何で、どもるんや、オレ！

何もしとらんのに、悪いことしましたって、嘘の自由してるようなもんやんか！

和葉をちらつと見ると、何だかぼんやりしている。

「和葉？」

「ん？アタシ、先に教室行くわ。」

（えっ？）

「ほなな？」

「あ、ああ。」

（珍しく小悪魔スイッチ入らんやっとな・・・）

って、何、残念がっとなねん、オレ！

ふと気づいたときには、和葉はもういなかった。

「かずは・・・？」

・・・それが和葉に最初に感じた違和感やった・・・。

異変（後書き）

和葉ちゃんに異変が！？お前のせいだ！平次！

## 変な和葉、元気なオレ

二人でまったり過ごす休日の午後。

オレがベッドに寄りかかって雑誌を読んでいると、

「平次」

ぴとつと和葉がひつついてきた。

(・・・かわええ)

ほんまにかわええ。かわいすぎんねん、和葉。

「どつしたん？」

思わず甘い声が出る。

「ん？何や甘えたなつた。」

和葉がすりよつてきながら、甘えて答える。

・・・鼻血出そ・・・

思わず和葉の顔を覗き込むと、和葉が上目遣いで見上げてきた。

あ、あかん・・・その目は反則や・・・

その大きな目に誘われるように、顔を近づけ、和葉にそつとキスをする。

最初は触れるだけのキスだったのが、だんだん深くなり、いつの間にか、和葉に覆いかぶさるような体勢になっていた。

「・・・んっ。」

時折聞こえる和葉の鼻にかかったような声が、オレの五感を刺激する。

「和葉。」

「んっ？」

「ええか？」

「うん」

オレ達はそのまま、ベッドにもつれ込んだ。  
そして、愛し合った。

・・・んやけど・・・

（アレ？）

隣には、気を失って眠る和葉。

（最近、このパターンばっかやないか？）

オレはふと気がついた。

和葉は何かの拍子にスイッチが入ると、小悪魔になる。  
そのスイッチが何で入るのかわからんのが、ロシアンルーレットみたいで、怖くていい所（？）なんやけど・・・

（そっぴや、近頃、小悪魔和葉見とらんわ・・・）

という事は、最近まったく弄られてないわけで・・・

そう思いだしたら、また下半身が疼きだした。

(うわっ、何やコレ！さっき散々したんに！)

隣にはもう精根尽き果てて眠る和葉。

そして、元気一杯のオレ。

・・・どうせいつちゅうねん！

いやいやいや、その前に、和葉どうしたんやろ？

オレは漠然とした不安と、元気すぎるオレをもてあまし、呆然と座り込んだ。

変な和葉、元気なオレ（後書き）

平次、やっと異変に気づくの巻

## 平次、もんもん編

和葉がおかしい。

いや、おかしうはないか・・・  
元に戻ったうちゅうか・・・  
何やら、付き合い始めの和葉になってもうた。

オレが何をしても、恥らう。

いやいや、それはそれで、いいんやけど。  
初々しいし、かわいさ倍増やし。  
オレも、男らしく攻められるし。  
うん。望んでたとおりや！

・・・なんやけど・・・な。

小悪魔和葉が見れんと、物足りんちゅうか、なんちゅうか・・・。

もんもんと考えていたら、また、女の子にぶつかってしまった。

「きゃっ」

「あ、すまん。」

またちらりと見える、白の下着。

・・・

「ほい。」

その声をかけて立ち上がらせる。

「ありがとうございます。」

「ああ。」

あかん。まじであかん。

何をみても、反応せんようになってもうた。

セーラー服の下のチラリズムは、思春期の男にとって、最高のシユチエーションやる！

大丈夫か、オレ！？

・・・そういえば、雑誌を見ても最近いまいち興奮せんような・・・

まずうないか？オレ？

またもや、もんもんとしていたら、

「平次」

後ろから和葉が声をかけてきた。

「何や？」

オレは返事しながら振り返る。

そこには、風になびく髪を手で押さえ、鞆でスカートを押さえ立て立つ和葉の姿が・・・

「もう、帰る？」

ごくっ

風でちらちら見える白い足が艶かしい。

手で髪を押さええているせいか、わき腹もちらちらと・・・

「・・・和葉。」

「何？」

「走って帰るで。」

「はっ？」

「急げっ！」

・・・・・・・・・・・・・・・・

「かず・・・は？もう、寝たんか？」

隣には、またもや精根尽き果てて眠る和葉。

そして、またもや元気一杯のオレ

どどどど、どうなつとるんや。

大丈夫か、オレ！？

和葉にしか反応せん上に、和葉でも満足できんくなってもうた！

何？何の呪いや、コレ？

和葉、オレの体に何かしかけたんか？

・・・ほんま、どないしよう・・・

オレは思わず天を仰いだ。



平次、もんもん編（後書き）

平次の身にも異変が！？

## 平次、もんもんもん編

最近オレはおかしい・・・  
オレの体に何が・・・

和葉とのベッドでのまったりトーク中。  
オレは思い切って、あのことを聞くことにした。

「なあ、和葉？」

「なん？」

・・・掠れた声がまたそそる・・・っていかん、いかん！

「聞きたいことがあるんやけど。」

「なあに？」

「最近、ほら、お前、何かほら、なあ？」

「はっ？何？」

「いや、ほら、オレに何か、ちよっかい出してこんよな？」

「ちよっかいって？」

「あ、ほら、何や、アレや。そうそう、たまには、前みたいにして  
くれてもええんやで？」

「前みたいって？」

「……………（弄るとは、男の沽券に関わるから言いたくない！）」

「変な平次。アタシは前も今も同じやで。」

「……………違うと思う。」

「そう？」

隣で和葉は、ん〜と人差し指をあごにあてて考え込んでいる。

・・・かわええ・・・

「・・・和葉・・・」

「ん？」

「しよつか？」

「まつ、また？さつきしたばつかやのに？」

「ん。」

「いや、アタシ、もう、無理やで？」

「オレも我慢が無理や。」

「えっ、ちよ、平次・・・あん。やめっ・・・ああ・・・」

・・・

本日2ラウンド目終了。

いつものように、気を失う和葉。  
元気なオレ。

おかしい。ほんとにおかしい。

オレがいくら盛りの思春期やとしても、これはおかしい。

夜もよく寝れんし・・・和葉はかわいいし・・・（これは関係ないか）

オレ、狂ったんやるか・・・

それに小悪魔和葉も見らんし・・・

はっ！まさか、他に弄る相手見つけたとか！？

「そんなん、いやや~~~~~!!!!」

オレはベッドから飛び起きると、

「ぐどーーーーー」

泣きながら、東京の親友に電話をかけた。

平次、もんもん編（後書き）

平次一人もんもん編は終わりです。次は東京のあの方が被害こうむります。

痴情のもつれ（前書き）

工藤邸にて

## 痴情のもつれ

夜。

蘭とまったりティータイム。

その静寂を破るかのような、けたたましい携帯の呼び出し音。

「ちっ、誰だよ。」

・・・着信 服部平次・・・

「・・・無視すっかな。」

「だあれ？」

「服部。」

「服部君？事件かもしれないよ。出てあげたら？」

優しいな、蘭は。でもな、多分違うと思うぜ。

「はい、くどくどーーーーー」

・・・ほら、やっぱり。

「うっせいぞ、服部！」

「く、くどー。オレ、和葉がおかしうなって、えぐ、オレも、えぐえぐえぐ。」

「あ？何言っただよ。訳わかんねえよ。切るぞ。」

「ま、待って、お前しか頼るヤツがおらんねん！ひっく・・・。」

「ったく・・・和葉ちゃんがおかしくなって、どうしたって？」

「あんな・・・。」

.....このヤロー.....

「服部君何だつて？」

「あ？痴情のもつれだ。」

オレはこめかみを押さえながら、返事をする。

「つたく、何でオレがあんな訳わからん相談に乗んなきゃいけねえんだよ！」

「ふうん。和葉ちゃんに嫌われちゃったのかと思った。」

「.....そりゃねえだろ。」

「そついや、和葉ちゃんの小悪魔がどうこう言ってたな。」

「弄られすぎて、きついんじゃない？」

「.....あつ、これ内緒だった。」

蘭の方をちらっと見ると、蘭はそ知らぬ顔をして、紅茶を飲んでい

「.....蘭？」

「何？」

「ひよつとして、お前、和葉ちゃんのこと、知ってんな？」

「何が？ああ、和葉ちゃんが、服部君を弄って楽しんでるってこと？」

・・・筒抜けじゃん。

「そう、それ。」

「知ってるよ。和葉ちゃんが教えてくれたもん。」

ふん

「何か、おもしろいよね。」

何！？

「じゃあ、俺たちも・・・やんないわよ。バカ！」

即答ですか。

「何でだよ。」

俺は拗ねたふりして、ぶーぶー言う。

「あのね、服部君は絶対和葉ちゃんには敵わないの！だから、言い成りになるのよ。でも、新一は違うでしょ？絶対仕返し考えるもん。仕返しなんかされたら、私の体が持・ち・ま・せ・ん！」

はははは。確かにな。

「それじゃ、何でそんなこと始めたか、理由知ってつか？」

「うん。何かね、服部君とする時ね、最初しか優しくしてくれなくて、好き勝手されたんだって。それで、頭にきたから仕返ししたら、はまったって言ってたよ。」

・・・自業自得じゃねえかよ・・・服部・・・

「でも、おかしいなあ。」

蘭が首を傾げる。

「何がだよ。」

「和葉ちゃん、最近それ止めたって言ってたよ。服部君が悩むはずないけどなあ？」

「はっ？何で？」

「知らな〜い。」

蘭はそういうと、キッチンに去っていった。

「妙だな・・・。」

(ちゃんと話きいてやれば、よかったな。)

ちょっと良心が痛んだけど、面倒くさいから、放っておいた。

でも、次に会った服部は、黒い肌でもわかるくらいの凄い隈を作っていて、俺は自分の薄情さをちよっぴり後悔したのだった。

痴情のもつれ（後書き）

どうした平次！？

君が黒いワケ（前書き）

工藤視点

## 君が黒いワケ

「す、すげーな・・・その隈・・・。」  
「ふっふっふ。そーかあ？」

ここは俺んちのリビング。

警視庁からの要請があった事件は、2人でさっさと解決し、俺は今、服部と向かい合ってコーヒを飲んでる。

改めてみると、こいつの顔、すげーことになってるぜ・・・。  
こんだけ色黒なのに、隈がわかるって、どんだけ濃い隈なんだよ！

それにしても・・・。

「そんなに疲れてそうでも、推理力は落ちてないんだな・・・。」  
「当たり前や！オレを誰だと思ってんねん！」

空元気が痛々しいぜ・・・服部よ・・・

「で、和葉ちゃんとは、どうなんだよ？今日も仲良く一緒に来てたから、うまいってるんだろ？」

当の和葉ちゃんは今、蘭と2人でショッピングに行っている。

ぐすっ 服部が下を向いた。

「えっ？違うのか？」

「・・・くど・・・。」

「何だよ。」

「オレ、和葉に見放されたかもしれん・・・。」

「はああ？」

「小悪魔和葉様が、もう降臨してくれんねんっ！」

「意味わかんねえ。わかりやすく説明しやがれ！」

・・・・・・・・・・・・・・・・

「へえ。何でかわからないけど、和葉ちゃんが小悪魔になることがなくなつて、清纯派に戻つたつてわけね。」

コクン 服部が頷く。

「ふうん。それで、物足りなくて、和葉ちゃんを襲うように、ほぼ毎日してるわけか。」

コクン

「で、それでも物足りなくて、自分でもやっちゃっ「あああああああ、そこまですわんでええわっ！」

「うっせえ！黙れ！そりゃ、疲れるだろうよ・・・・。バカかおめえ。」

「バカ言うな・・・・これでも、辛いねん・・・・。」

「（まじで、バカだ・・・・コイツ）で？和葉ちゃんに見放されるつてのは、小悪魔にならないからか？」

コクン

「・・・・どっかに弄る相手見つけたのかもしれない・・・・。」

「（それは、ないと思うけどなあ）それよりさ、いつから和葉ちゃんが元に戻つたのか、考えようぜ。」

オレは今までコイツを放つておいた罪滅ぼしに、そう提案した。（嫌だけど）

「いつから・・・・？」

「どっかに原因があるはずだからさ、それを取り除けば、解決するさ。おめー、一応探偵だろ？」

「・・・一応は余計や。お前より名探偵やわ。」

「彼女のこともわかんねえヤツに言われたかねえよ。とっと思い出しやがれっ。」

「えっと・・・最後に小悪魔になったのは・・・先月の中頃やったかな？」

「で？それ前後に何か変化はなかったのか。」

「・・・あつたな。何や、和葉がぼーっとして・・・。」

「それは、何でだ？」

「オレが女とぶつかって、ほいで、和葉がやってきて・・・いつもやったら、『お仕置き』とか何とか言うのに、言われんやっだから、よう覚えとるわ。」

「残念だったんだな。」

「そう、残念・・・ちやうて。何や和葉の様子が変で・・・あ、そうや、あの日からや。間違いない。」

「その女つつうのは、どんな女だ？」

「白いレースのパンツや。」

「・・・てめえ・・・誰も下着の事なんか聞いてねえよ！第一、何でおめえがそんなこと知ってんだよっ！」

「ぶっかつた言うたやないか！そんな時ちらっと思えたんや。清純そっちな子やったから、よう覚えてんねん！」

「それだよ！」

「どれや！」

「和葉ちゃん、お前が清純そっちな子の下着見て、でろーっと思ってるのを目撃して、お前が清純な子が好きに違いないうって思ったんだよっ、絶対そうだ。おめーのせいだ。とっくと、帰りやがれ。」

「なんでやねん！確かに清純そっちな子もええな。とはちろっと思っただけど・・・。」

「・・・やっぱり思っただんや。」

「か、か、か、和葉！」

ドラマのシーンには、悲しそつに佇む和葉ちゃんの姿があった。

君が黒いワケ（後書き）

次、解決！？

和葉、復活？（前書き）

平次視点です。和葉ちゃん復活するか！？

## 和葉、復活？

「ちゃうて。ちゃうんやつて。和葉、聞け！」

必死に弁明するオレ。

和葉はちつともこつちを見てくれない。

「平次はアタシじゃなくて、あんな純情そつな子がええんやな……」

「やから、ちゃうつて。ちょっとええなって思っただけで、お前以上でどうこう思うはずないわつ。」

「やっぱ思ったんやつ。やからアタシ、清纯になろうとしたんに……それやのに、平次は満たされず毎日毎日、人のことおもちゃみたいに抱いて……ひどいわつ平次。」

ぎゅっ

逃げようとする和葉を抱きしめる。

「ちゃうつて。オレ、お前以外に欲情せんねん！やから毎日毎日、お前を襲って……。あんな白パンツの子なんか、顔もよう覚えとらんわつ。」

ぎゅーっ

さらに和葉を強く抱きしめた。

「オレは、お前がオニだろうが、小悪魔だろうが、清纯だろうが、和葉やから好きなんや！お前以外にオレにはおらんのや！」

オレは叫んだ。

じたじたしていた、和葉の動きがぴたつと止まる。

「ほ、ほんまに？ほんまに平次？」

「ほんまや。オレはお前が一番好きなんやつ！」

「アタシが何をしても？」

「当たり前や！お前が大好きやつ！」

「嬉しい・・・アタシも・・・」

ぎゅう 和葉が抱きついてきた。

「かずは・・・」

「アタシも、平次の事・・・大好物やで？」

・・・だ、大好物？

つーっ 背筋を和葉の指が逆撫でする。

「あううっ。」

腕の中の和葉の顔を見ると・・・目をいたずらっ子のように輝かせ、  
口元には妖艶な笑みを浮かべ・・・

「か、和葉サン？い、今の感動的な会話のどこに、小悪魔スイッチ  
が・・・？」

動揺するオレをよそに、和葉はますます妖しく微笑む。

くいつ 下から人差し指で顎を持ち上げられた。

「ほな、帰ろうか。へえじ」

「いや、もう少し・・・ここに・・・。(何や身の危険が・・・)」



「や？」

くるん。和葉が目を動かす。

．．．か、かわええ．．．

「や．．．優しくしてな．．．和葉。」

「うん」

和葉が楽しそうやから、まあえつか．．．。

工藤の同情的な視線を背に受けながら、オレは工藤邸を後にした。

．．．．．

「．．．やから、新幹線の中では、やめてえな！かずはあ。」

「うふふふ。へえじ、かわいい」

和葉、復活？（後書き）

小悪魔ついに降臨！次はおまけです。

小悪魔降臨！（前書き）

白パンツのなぞも解ける！

## 小悪魔降臨！

えぐえぐえぐ

「・・・もう泣くなよ、服部。」

「し、新幹線の中は、や、止めてっというたのに・・・」

「しょーがねえだろ。おめえ、『優しくして』って許可してたじゃねえかよ。」

「しゃ、車掌さんも来るんに、ま、満員やったのに・・・ひつく・・・か、和葉がにこにこ笑って、オレの・・・」

「だあああっわかった！わかったから、皆まで言っな！聞きたくねえ！」

「えぐえぐえぐっ 寝屋川に着くまでずっとやで・・・うっく。ほんで、家に帰ってからも弄られっぱなしで・・・」

「ま、元鞘に戻って、お前も万年欲求不満が解消してよかったじゃねえかよ。」

「前の方がまだマシやった〜オレ、もう、イヤや〜〜〜。」

「・・・切るぞ、服部。それじゃな。」

プツッ  
電話の向こうではまだ何か叫んでいたが、無常にも切ってやった。

「服部君なの？」

蘭が楽しそうに話しかけてきた。

「ああ。」

「ひどく弄られてるんでしょ？」

「・・・何で知ってたんだ？」

「和葉ちゃん、清纯な子出現の時、すごく落ち込んでたんだ。『アタシ、平次に捨てられるかも。調子に乗りすぎた。』って。」

「へええ。」

「それでね、『そんなことないよ。服部君は和葉ちゃんのを好きなんだよ。』って言ったらね、『もし、平次がアタシの全てを無条件で受け入れてくれたら、もうアタシから離れられないように容赦しない。』って。だから、今は容赦なしなんじゃない?」

「へ、へえ。(頑張れ、服部……)」

くすくすくす。蘭が本当に楽しそうに笑う。

「何だか、わかるな〜その気持ち。」

「えっ?まじ!?!」

うふふふふ。

蘭はとつてもきれいに笑っていた。

一方大阪では……

「あつ……もうかず……は、堪忍してえな……」

「まあだ」

「んんんっ……ああああ……やめっ、和葉、お願いっもう、た、助けて〜」

「まあだ、まあだ」

「ひいひいひいひい。」

「アタシ以外を見た罰や。まだまだやで?へ・え・じ」

「やから、見てないって〜

あぁっ……そこ……あっ……んっ……

・やめてえな〜かずはぁ。」

「うふふふ。」

「誰か助けて~~~~。」

【おまけ】

・・・改方学園にて

「やから言つたやろ？清纯派で攻めても、服部は落ちんつて。」

「くっそー。服部は初心そうだから、絶対こついうシユチエーションには、弱いつて思うたんにな。」

「よう言つわ。二回目ぶつかった時なんか、顔も見てもらえてなかったやん。」

「白パンに食いつくと思つたんに…………。」

「残念やったな、服部食えんで。服部は遠山和葉以外目に入ってないんやで？アンタも潔う諦め。」

「うっさいわ。」

## ソフトクリーム

「へ・え・じ」

オレの名を呼ぶ、かわいい彼女。

でも、この呼び方の時は、ろくなこと考えていない。

「な、何？」

オレは警戒して答える。

「ソフトクリーム食べる？」

「あ、食う！」

「はい。あゝん」

べちゃ

口のまわり一杯に突っ込まれた。

「げふっ。な、何すんねん！お前！」

「あらあら、平ちゃんは、食べ方下手ですねえ。」

「お前が、突っ込んだんやろうが！何かのコントかい！」

うふふふ。

和葉が妖しく微笑む。

「そつやな。アタシのせいやな。じゃあ、キレイにしてあげる。」

ぺろっ

オレの頬を和葉が舐めた。

「わっ。」

呆気にとられるオレの膝にのっかり、  
ぺろっぺろっぺろっ

猫のようにオレの口周りのソフトクリームを舐め取る。

「……んっ。」

くすぐったさに思わず声が出る。

うふふふ。和葉は楽しそうにオレを舐める。

そして、くいつと顎を持ち上げられた。

「気持ちいい？平次？」

「……うん。」

「口も舐めて欲しい？」

和葉の赤い唇が妖しく光る。

「……うん。」

「うふふふ。ええ子やなあ。へえじ。」

ぺろり

唇を舐められた。

ぺろり ぺろり

和葉のやわらかい舌が、オレの唇を愛撫するよつに舐め尽くす。

「くっふっふっ……うっ」

背筋がぞくぞくする。

舐める間も、和葉の細い指がオレの髪をやさしく撫でる。

くううううう　気持ちええ・・・

もう我慢できず、

「和葉っ！」

キスして押し倒そうとしたら、するりと身をかわされた。

「はいっ！きれいになったで。帰ろうか？平次？」

・・・アンタ、オニや〜って、ここ・・・えっ？

「か、和葉、コ、ココ・・・こ、公園・・・。」

今更青ざめるオレ・・・

「うふふふ。誰かに見られたかもなあ。へえじの恍惚とした顔」

やっぱり、アンタ、オニや〜〜（涙）

・・・でもでも、気持ち良かった・・・オレのあほっ

## ソフトクリーム（後書き）

下校時ラブ。夕暮れ時ということので、ご容赦を・・・

## おもちゃ

「か、和葉？」

「ん？」

「ななな何やつ、そ、それっ？」

「ああ、コレ？工藤君にもらったん。」

そう言つて和葉が手にしていたのは、手錠と。。アヤシイおもちゃ。。

「なななな、何で工藤がそないもん持つとんねん。」

「何かな、蘭ちゃんに内緒で買ったのが見つかつて、しばき倒されたらしくつてな。捨てるつて言うから、もったいなくて、アタシに頂戴つて言うたん。」

「アホっ！お前には恥じらいっちゅうもんがないのか？返してこんかいっ！」

カチツ

カチツ？何か今カチツて？

「・・・ふん。」

「か、和葉？」

（やばっ、小悪魔スイッチ入つてもうた！？）

妖しい手つきでそれを触りながら、和葉がオレに向かって物憂げに言った。

「アタシ、コレ、どうやって使うんか、知らんのやけど。へえじは知つとんのやな?」

「いや、知ってるってほどじゃ……。」

「ふうん。知ってるんやな?」

「……はい。」

「そう。じゃあ、はい。」

にっこりして手渡される。

はい?

「コレ、どうしろと?」

「使つて見せて?アタシ知らんねん。」

「いいいいいいややややや。むむむむむ無理。」

「じゃあ、使い方教えて?アンタに使つてみるから。」

「いやややややや、オ、オレ、どっちかといえば、されるよりする方が……。」

にっこり。和葉が笑う。

「そっかー。やっぱりアタシにされるより、自分でする方がいいんやな!」

「ちがつ。」

「はい。平次やってみて?」

「いや、あの。」

カチャ

「あああああ、今、手錠かけたやろ?」  
うふふふふ。

「おいたするからなあ。このお手で。」

ぺろっ

指を舐められる。

「やあああああ。助けて〜〜。」

「うふふふ。逃がさんへんで、へえじ」

・・・結局、和葉は本当にコレが何か知らなかった・・・

この小悪魔と純情のアンバランスさが、また・・・って、違うねん！嫌がれ！オレ・・・

本当に、本当に、怖かった・・・しくしくしくしく

・・・工藤め、覚えとれ〜今度仕返ししてくれるわっ

おもちゃ  
(後書き)

和葉は、知識は純情なんです。本能が小悪魔なだけで・・・

放課後（前書き）

放課後の教室ラブ

## 放課後

「んっ、平次」

「声出すなや。誰か来たら、どうするん？」

「やつ。」

放課後の教室でいちゃいちゃタイム。

今日は、小悪魔じゃないから、和葉はオレの意のまま。

「は・ん。平次やめ……て……」

「まだやで。和葉。」

「んんん……あんっ。」

ああ、我慢ならんっ

セーラー服の下から、こっそり手を入れた瞬間、

カチッ

やああああああ。何で？何で？何で、ココでスイッチ？

和葉の顔を見ると、上気した頬のまま、妖艶に微笑んでいる。

「か、和葉サン？」

ぐいっ

手を掴まれて、胸に持っていかれる。

「かかかか、和葉？」

「うふふふ。柔らかい？へえじ？」

「……う、うん。」

「もつと触りたい？」

「……うん。」

「ええ子やなあ。へえじは。そしたら……。」

すっ オレの制服に手を伸ばす。

「先にへえじに触れてからな。」

「いいいいや。いいっ。いいですっ。」

「そんな興奮せんでもええんやで？」

ぶちっぶちっぶち

ボタンが器用に外される。

全部はだけた瞬間、っーっ オレの素肌を和葉の指が撫でる。

「……くっ。」

「……気持ちええん？」

「……うん。」

「もつと触って欲しいんやろ。」

「……うん。」

「うぶぶぶ。ええ子のへえじは、大好物やで。」

っーっ 和葉の細い指が踊るように、オレの素肌を滑る。

「あっ ああっ！んんんっ やめっ あっ あああああ！」

そこからは、めくるめくピンクの世界……。

しくしくしくしく

シャツの前がはだけたまま、体操座りして泣くオレ。

「ひどっ・・・ひどい・・・和葉。」

「いつまで、めそめそしとんの？もう、帰ろ？」

「・・・帰りとうても、立てんのじゃ！」

「えっ？足りんかったん？」

「ちがっ。」

「そうなら、そう言つてや。へ・え・じ」

「いや~~~~~。」

誰か来て~~~~~

放課後（後書き）

平次襲われシュチエーションをお好きな方は『小悪魔和葉』まで

放課後の秘密（前書き）

『放課後』の続編です。

## 放課後の秘密

「平次、大丈夫？」

教室の後ろの壁に人形のように、もたれかかるオレ。

もう指一本動かすのも、億劫や・・・  
アレから、何分弄られたんやろ・・・

オレがだらんと伸ばした足の間、和葉が座り込んで、オレの顔を覗き込む。

「ほんま、大丈夫？」

大きな目が心配そうに揺れている。

・・・そんな心配してくれるんやったら、目一杯悪戯するのやめてくれ・・・

そう思いながらも、コクンとオレは頷いた。

「・・・良かった・・・」

和葉がぎゅっとオレの頭を抱きしめる。

「・・・なあ、和葉・・・」

「なん？」

「あんな激しいことしてて、誰か来たらどうするつもりやったんや？」

「とりあえず、アタシがその人に技かけて気絶させて、その間に平次を逃がすつもりやったで？」

にっこりして、和葉は言う。

「お前・・・一般人に技かけるのやめい・・・。」  
オレはがっくり頂垂れた・・・。

うふふ。

笑いながら和葉がオレの顎をくいっと掴んで、顔を上げさせる。

「アタシは、アタシの大事な平次君を守るためなら、何でもするで？」

「・・・その大事な平次君を、和葉ちゃんが一番いじめているような気がオレはするんやけど・・・？」

「かわいがつてるの間違いやろ？」

くすくすくす。和葉は可笑しそうに笑って、オレの髪をかき混ぜた。

「やめい。」

「平次。」

「ん？」

「大好きやで・・・。」

和葉がオレの首に手を回し、上からキスしてきた。

オレも何だか嬉しくなって、和葉の細い腰と肩に手を回し、キスしながら、ぎゅっと抱きしめる。

カタン

「？」

キスしながら音がした方を見ると、真っ赤になった女生徒が・・・

(あっ)

そう思ったけど、和葉は気がつかないのか、キスを止めない。

(まっ、えっか・・・)

しばらく和葉とのキスを楽しんで、ふと和葉の顔を見上げた。

・・・何故か、和葉は妖しい綺麗な顔で微笑んでいた。

「か、和葉？」

「んふふふ。やっと見せ付けられたなあ。」

「な、何が？」

「さっきの子。アンタに前、プレゼント押し付けてきた子やろ？」

「おっ、おまつ、気づいて・・・」

「アタシだって、合気道の有段者やで？気配ぐらいは感じるわ。あの子、ずっとアタシら付け回しとってな。」

和葉の綺麗な眉が片方上がる。

「・・・はあ。」

「どうせやったら、10分前に来てくれれば良かったんに・・・。」

10分前・・・

オレが和葉にアレヤコレヤ、ピンクな悪戯を最高潮にされてた頃・・・

「ま、今日のところは、キスを見せただけで、勘弁しよっかな。」

「オニヤ〜アンタ、オニヤ〜」。

「はいはい。ほな帰ろうか？」

可愛い顔して、にっこり笑われ、オレは素直に頷いた。

(・・・オレ、一生コイツに敵わんような気がする・・・)

・・・でも、2人で手を繋いで帰った。

オレ、やっぱり幸せや。

## 放課後の秘密（後書き）

女生徒は、『本能』で平次にプレゼントを押し付けた子です。

男のナイシヨ話(前書き)

またまた工藤邸にて。

## 男のナイシヨ話

カラン ウィスキーの氷が音を立てる。

俺の家のリビングには、服部と俺の2人。

「……で、一晩で三回もイカされたのかよ……。」

「正確に言えば、一時間以内や……。」

「や、やるなあ、和葉ちゃん……。」

「その後日、和葉を攻めたんやけど……。」

「ああ。どうなった？」

「次の日、返り討ちにあつて、4回イカされた。しかも、下にオヤジやオカンがおるんに……。」

「……そ、そいつは、きつかったな……。」

「うっ……和葉は制服も脱がず……オレだけ……くっ。」

「……泣くなよ、服部。」

ひっくひっくひっく

酒が入っているせいか、いじけて服部が泣き出した。

「でも、俺はちよつと羨ましいけどな。」

「……お前も弄られたいん？」

「違つって。ま、一粒で二度おいしくはあるよな。聖女と小悪魔と。」

「……グリコの何とかみたいに……お前、一回弄られてみるか？死ぬほど、辛いで。」

「いや、遠慮しとく。そんなことじゃなくてさ、お前、事件の後、悪夢見るんだろ？」

「はっ？何や急に……ああ、たまに見るな。」

「俺、前、和葉ちゃんに聞かれたんだよ。事件は辛いのかって。どうしたら、楽になれるのかって。」

「……………」

「あんまり真剣に聞くからさ、俺、和葉ちゃんにできることをって思って『ぐっすり眠ること』って言ったんだよ。」

「和葉が……………」

「ああ。だから、お前、和葉ちゃんといると、悪夢見ないだろ？」

「悪夢どころか、夢も見らんわ。」

「そうだろ？感謝しろよ。和葉ちゃんに。」

「……………お前は？」

「はっ？」

「お前はどっぐっすり寝てるんや。」

「俺は……………蘭の豊かな胸でぐっすりと。」

「オレもそっちがええ。」

「……………誰がお前なんかに、蘭の胸を貸すかよっ！」

「ちゃう！和葉のや！第一何で『好きな女の胸で眠ること』って教えんかったんやっ！」

「……………いや、何となく……………含みを持たせた方が面白いかな。」

「

「お前のせいじゃないかっ！」

「ま、ぐっすり眠れるからいいじゃねえか。」

「事件で疲れてるのに、100m走100本ダッシュくらいしんどいんやぞ！」

「……………準備運動しろよ。服部。」

「何で、和葉と寝るのに、準備運動せなあかんねん！」

えぐえぐえぐえぐ

「もう、いやや……………」

## 男のナイシヨ話（後書き）

工藤と平次の彼女トーク。和葉の執拗ないたずらには、理由がありました（笑）何をされたか知りたい方は『夜の平和な週末』まで。

## 100mダッシュ(前書き)

放課後教室にて。平次とその友達の会話。



「……やばい！オレ、何口走った？……」

「オレやなくて、何や！服部。」

「はよ、言え！気になるやないか！」

「い、いや、オレやなくて……。」

「ぐくっ」

みんなが生唾を飲み込むのが聞こえる……

「か、和葉が、そ、そんならい、きついな」と……。」

「……お前やつば猛獣や……。」

「ああ、遠山かわいそうに……オレやったら優しいつしてやるんに……。」

「……普通の時はな……オレだって優しいねん！」

その時、教室のドアがらっと開いた。

「平次〜。」

か、和葉っ。なんちゅうタイミングの悪さ……。

「と、遠山っ。」

鼻息荒くヤローどもが和葉を見ている。

「な……みんなどうしたん？」

かわいく首をかしげる和葉。

・・・ああ、かわええ・・・

「ああああ、遠山かわいそうに〜。」

「服部にしんどくなったら、オレにこいや〜。」

「オレ、優しいで〜。」

「ちよっ、お前ら何言っとなねん！」

訳がわからずきよとんとする和葉。

「こんな華奢なのに〜夜の100m走なんてかわいそすぎる〜。」

あああああああ！や〜め〜て〜！ば〜れ〜る〜！

鈍い（普通バージョンの）和葉でも、うすらぼんやりと意味がわか  
つたらしく

「・・・もう、平次・・・変な事言わんといて・・・。」  
顔を真っ赤にして教室を出て行った。

よ、よかったあ・・・スイッチ入らんかった・・・。

「か、かわええ。」

「ああ、オレの天使や・・・。」

オレの安堵をよそに、男どもが騒ぎ立てる。

（天使やなくて、小悪魔やつ！でも、スイッチ入らんやったから、  
ほんと助かったわ〜）

でも、そう思った自分が甘かったと悟ったのは、事件がすべて解決した夜だった。

100Mダッシュ(後書き)

次へ続く!

1000EダッシュH(前書き)

『1000EダッシュH』の続きです。

## 1000mダッシュ

「か、かずはサン？」

壁に逃げるオレ。

「なあに？」

妖しく笑いながら、オレににじり寄る和葉。

「今日、オレ、事件で疲れてるし・・・ほら、下にオカン達もおるし。」

「大丈夫 お父ちゃん達は、事件の後処理で、府警に泊り込み。お母ちゃん達は、事件解決の奥様同士の打ち上げで温泉。」

「そそそ、そうなんや・・・ほな、オレもう寝ようかな・・・」  
「んふふふ。アタシがぐっすり眠れるようにして、あげる。」

ひひひひひ。何でいつもよりやる気なん！

「いいいや、いいデス・・・。」

「・・・そう？そうよな〜こんなくったくたなのに、1000m走1000本ダッシュはきついよなあ。」

つーっ 和葉の指がオレの頬を撫でる。

「き、聞いてたん？」

「あとで、聞いたんよ・・・きつい思いさせて、悪かったなあ。」  
「い、いえ・・・そんなこと・・・。」

「今日は早く終わるために、インターバルなしで1000m走ダッシュ行こうか？」

「せ、1000m!?!?」

にっこり爽やかに笑うと、和葉はぱつと服を脱いだ。

ピンクのキャミにお揃いの下着・・・おおお！ガーターベルトまで・

うひゃーきれーやなー

思わず全身を眺める。

かちゃ

(ん？かちゃ？)

和葉の色っぽい姿に思考が止まっていたオレは、ベッドの柵に後ろ手に手錠をかけられて、現実を引き戻された。

「あわわわわ。か、和葉(何？コレ?)」

オレの問いかけは、和葉の激しいキスでかき消された。

ちゅっちゅっちゅぱっ

「ん・・・ん・・・っ・・・」

思わず声が漏れる。

「気持ちいい？へえじ？」

「ん。んんん・・・。」

「そうなん？うふふ。へえじはかわいいーなあ。今日はリクエスト通り、休みなくイコうな？」

リクエスト！？休みなく！？はいっ！？

「やつ・・・ああ・・・あっ・・・だ・・・めえ・・・」

「んふふふ。悦んでるくせに。」

「いややあ。うわ~~~~ん。おとーん、おかーん助けて〜」

「誰も来んて。へ・え・じ」

「んんっんんっああっ」

「か、かずはあ・・・もうかんべんしてえな・・・。」

この1000m走ダッシュが終わったのは、東の空が明るくなった頃やった・・・

1000Eタッシュ (後書き)

内容は「夜の平和な週末」で！

プランゼント(前書き)

「100003ダッシュ」の翌日

## プレゼント

「うそうそうそ」

下半身への違和感で目が覚める

「ん？か・・・ずはあ？」

昨日ずっと叫んでいたせいか、声が掠れてる。

(昨日もほんと、好き勝手されてもった・・・しくしくしく)  
オレが内心嘆いていると、

「おはよ。へえじ。って言うても、もう夕方やで？」

かわいい和葉の顔が、アップに映った。

「ゆ、夕方!？」

あ、ほんとや・・・寝る前、明るく白んでいた空が、オレンジ色になっとなる・・・

・・・こ、こんな時間になるまで、気がつかんくらい、オレ、疲れ果てて・・・

ひっく・・・思わず涙が出た。

「ひっく・・・や、やりすぎちゃっつ？かずは・・・。」

「でも、ぐっすり寝れたやろ？」

「ひっくひっく・・・うん・・・。でも・・・うっく。」

「ほらほら、泣かんの。いいものプレゼントしてあげたから。」



「じ、こんなん、いせぢ〜」

「家用やつて。」

「……余計いぢぢ〜。」

ひっくひっくひっく 泣き続ける。

「へ・え・じ」

「ひっく」

「……そんなかわいいお尻、ずっとこっちむけとったら、襲つて  
」？」

「ひっくひっくひっく……も、もう、勘弁してください……わ  
ん」

「あ、やつぱ襲お……」

「ぢぢめ〜て〜。」

……次にオレが目覚めたのは、翌朝の事やった……ハラヘッ  
タ……

プレゼント(後書き)

日常編終了

ピンクのネオン(前書き)

平次・工藤・黒羽の男三人北の旅。語り・工藤。

## ピンクのネオン

「うひゃー……」

「すげえな……ここ。」

「入っちゃおう？」

ここは北の歓楽街。

高校生の俺たちには、刺激が強いネオンの光が瞬いている。

「ばっ……何言うねん！お前」

「入りたきゃ、おめーだけ入れよ。黒羽。」

「……いや、冗談だし。」

俺と服部と黒羽。

怪盗キッドの予告により、この札幌で三人顔を合わせた。

(勝負は引き分けだったけどな。)

もちろん今はプライベートだから、フツーに仲良くしている。

「……興味はあるんやけど……」

「なあ……高校生だしな……」

「最愛の彼女いるしねえ。」

三人後ろ髪を引かれながら、ネオンを後にしようとした、その瞬間、

「「「おわっ」「」」

三人の携帯が同時に鳴り響いた。

「か、かか和葉？」

「蘭？」

「青子？」

「「今、どこ？」」

「どこって、札幌・・・」

「の、どこ！？」

「へ・・・？」

「言えないところにいるんでしょ！？」

・・・何でわかるの？

服部をちらつと見ると、こっちを縋るような目で見ている。

・・・そんな目で見られても・・・

「今、服部達とメシ食いに行こうとしてて・・・。」

「・・・ご飯？女の子の間違いじゃないの？」

・・・蘭の声が低い・・・怖ええ・・・

「・・・な、何でそんなこと、いきなり・・・」

「ツイッター」

「はっ？」

「ツイッターで新一達の行動が出てるのよ。色っぽいお店を物色中ってね！今頃、周りに人が集まってるんじゃない！？」

慌てて周りを見回すと、何だか人が増えてきたような・・・

「後でかけ直す!ごめん!」

俺達は通話の相手にそういうと、猛ダツシユで逃げ出した。

.....

ここは、俺たちが宿泊するホテル。

服部は携帯を持ってうろろろろろろろろろろしている。

「.....落ち着けよ.....服部。」

「そーそー。何もやましいことないんだから、和葉ちゃんもちゃんと、わかってくれんじやない?」

軽く笑う黒羽。

ああ、こいつは、和葉ちゃんの小悪魔っぷり、目の当たりになかったんだな.....。

「.....オ、オレ.....折檻されるかもしれん。」

震える服部。

「せつ、折檻!?!」

驚く黒羽。

そーだなー。事の次第によっちゃ、折檻かもな、お前.....。

「ピリリリリ」「」

また三人の携帯が同時になった。

俺達は、はぁっとため息をついて、手強い敵に納得してもらったため、通話ボタンを押した。

ピンクのネオン(後書き)

三人北海道旅情編

灰（前書き）

ピンクのネオンの続きです

## 灰

「だ、大丈夫？服部？」

「だめだ・・・灰になつてる・・・。」

・・・北の大地で、服部は灰になつた・・・

さっきの電話で、ぷりぷり怒る女性陣に対し、

「蘭以外の女に、俺が見向きする訳ないだろ？」と俺

「青子を傷つけるようなことする訳ないじゃん！」これは、黒羽

そして・・・最強（恐？）の敵に向かつて

「和葉が怖いのに、そんなところ行くわけないやろっ！」  
と言い放つたバカ服部。

（げっ、それやばいって！）

（それ言っちゃ、いけないでしょ！？）

俺らの心の叫びは、ヤツには届かず・・・

それに対して和葉ちゃんは・・・

「工藤君や黒羽君のように、大事だからとか傷つけたくないから、  
じゃなくて、平次はアタシが怖いから行かなかつたんやね・・・ア  
ンタにとって、アタシは怖いだけの存在か・・・ようわかった。別  
に怒らんから、行ってき？ たつた今から、アンタは赤の他人や。お  
望みどおり、アンタにはもう関わらんから。ほなな。さよなら、平  
次。」

・・・ツーツーツーツ

そして、着拒、メール拒否、泣き崩れる鬱陶しい男が一人・・・

「終わったな。」

「そうだね。」

「・・・かじゆはあ・・・」

「泣くなよ。」

「服部が悪いよ、あれは。」

「・・・ひつくひつく・・・」

「折檻の方がましだったな。」

「いきなり、別れ話だもんね。」

「別れ話!？」

服部ががばつと起き上がった。

「ななな何や、そそそそれ!？」

「青子からのメール。『和葉ちゃんは、服部君との別れに大泣きして、今やつと寝ました。服部君はオホーツク海にでも捨ててきて下さい。』だつてさ。」

「蘭は、『服部君は網走へどうぞ』だつてさ。」

「別れとらんぞつ!オレ!」

「和葉ちゃんの中では、終わったみたいだぞ。」

「帰るっ!今から東京に帰るっ。」

「無茶言つな。ほら、寝ろ。」

「そうそう、一晩寝たら、和葉ちゃんも落ち着くよ。」

「……ちやう。」  
服部がぼつりと呟いた。

「はっ？」

「一晩置いたら、和葉の思考は、思い込みでとんでもない方に行くねん……」

「あつ、そう。でも、今からはどうしようもないから、寝たら？」  
黒羽もだんだん冷たくなっている。

「ぐどーどうにかしてくれー！」

「……鬱陶しいから、継りつくな！だいたいオメーが悪いんだろつ。怖いからって何だよ！フツー言うか？」

「……やって、ほんまやもん。」

「まだ言うか！和葉ちゃんを泣かせたくないからじゃないのかよ！？」

「それも、あるけど……」

「けど……？」

「怖い先やったんやもん……。」

はっ。俺と黒羽は失笑した。

「……怖いのがなくなつてよかったね。服部。」

「そうそう、今夜からお前は怖いものなしだな。ほら寝ろ。」

ぷしゅーっヤツはまた灰になった。

……朝起きたときも、服部はそのままの格好だった……

灰（後書き）

灰になった・・・ある漫画の好きなシーンです（笑）

## お帰り

「お帰り」

かわいい彼女の出迎え。

ここは羽田空港。

「蘭も青子ちゃんも来てくれたんだな。」

「お土産買ってきたよ。」

思わず微笑む俺と黒羽。

「わい。」

んゝ2人ともかわいいぜ。

「……かずはは……？」

どよんとした雰囲気の方が咳く。

「あつ、服部君、いたの？」

「あら、やだ、服部君も一緒だったの？」

冷たい2人……。

「……か、かじゆはは……？」

半べそかいて、また服部が聞く。

「和葉ちゃん？帰ったよ？」

「そうそう、彼氏もないのに、迎えに行く必要ないって。」

「はうっ……。」  
へたり込む服部。

「蘭、そのくらいにしとけよ……。」

「うふふ。そうっ？」

とっても可愛く笑う俺の天使。

「本当はいるんだろ？」

「うん。家にいるよ。泣きすぎで目が腫れて恥ずかしいから、新一家で待ってとくって。」

がばっ

それを聞いて、勢いよく立ち上がると、服部はもの凄いスピードで駆け出した。

「やっぱり、愛よね。」

「もう、見えないねえ服部君。」

のんびり呟く、女性陣。

「なあなあ、工藤。面白そうだから、俺等も急ごうぜ。」

何も知らない黒羽もつきつきして俺に言う。

「はああ……そうだな。お前も一回実物見た方が、いいかもな。」

これから起こるであろう事を想像し、疲れた体を引きずりながら、俺は帰路についた。

## 小悪魔降臨

「オレにはお前しかおらんねん！やから、オレから離れんでくれ！」  
「・・・いややつ！アンタ、アタシが怖いからって言ったやない！  
そんなんで縛り付けとるなんて、アタシ、悲しすぎる・・・」

抱き合っただまま、言い合う2人。

(おお、やってる、やってる。)

(おい、気づかれるなよ、黒羽・・・)

俺達2人は観戦中。(鑑賞か?)

「それは、オレが悪かった！怖いっていうのは、表面上のことやねん！」

「・・・表面上？」

「そう。オレの中身は『和葉』だけでできとるねん！やから、大事とか好きとかそういうのが、すぐには浮かばんねん！」

「・・・ようわからん・・・」

「オレもわからんかってん・・・でも、お前が別れる言うたから、気づいたねん・・・。オレ、お前がおらんやつたら・・・」

「・・・おらんやつたら？」

「やってけんねん・・・どうやって一日過ぐすかももつ浮かばんくらい、お前だけやねん。」

「ほんまに？ほんまに平次？」

「ほんまや・・・そんだけお前しかおらんねん、和葉。」

(ひゅーっ言うねえ、服部。でも、和葉ちゃんのどこが怖いんだよ?)

( 黙って見とけよ。 )

「・・・ほんまに？アタシがどんなに怖くても？」

「怖いことあらへんって。むしろ、それすら、お前の魅力やねん！」  
「・・・へえ・・・」

くすっ 和葉ちゃんが笑ったのがわかった。

「ほしたら、ご要望に応えんとあかなあ。」

「ひっ・・・か、かずは？」

ゆらゆら 和葉ちゃんが服部から体を離す。

そして、くいっ。いつものように服部の顎を下から指で持ち上げた。

「どうやったたら、アタシだけで満足してもらえるんかなあ？」

「い、いや、じゅ充分満足しております・・・。」

「うふふふ。またまた」

和葉ちゃんが服部の手を取り、指をゆっくりやらしく舐め始めた。

「や・・・やめてえな。」

「指・・・気持ちええんやろ？」

「あつやっ・・・やめっ。」

ごくっ

隣の黒羽が生唾を飲み込むのが聞こえた。

それが聞こえたのか、和葉ちゃんがこつちをみて妖艶に微笑む。

「ふん。指で我慢してあげよ思ったのに・・・黒羽君たちがおる

のに、いつものようにしてええん？へ・え・じ？」

流し目でこちらをちらっと見る。

がたんっ

さすがの黒羽もびっくりして尻餅をついた。

(ここまででお終いだな。)

俺はそっとドアを閉めた。

「ひiiiiiiiiい。やゝめ〜て〜。」

服部の絶叫がドアの向こうから聞こえてきた……。

おまけ

「和葉ちゃん、すごいな……。」

「ああ。小悪魔って表現がぴったりだろ？」

「何か、服部の生気吸って綺麗になってそう……。」

「黒羽、おめーも青子ちゃんにやってもらいたいか？」

「いや……ちょっとそうも思ったけど、やっぱりオレ、攻めるほうがいいや」

「俺も……。」

「「頑張れ、服部……。」」

オレの逆襲（前書き）

珍しく平次が逆襲

## オレの逆襲

「何や、あの男……。」

和葉と買い物にきて、ちよつと目を放した隙に、にやけた男が和葉にちよつかい出していた。

当の本人は、「男の下心なんか、なぐんも気付いていませうん。」  
という顔で、親切に何かを教えている。

(……あほがっ)

面倒見がいいのは、和葉のええところやけど、この女は鈍すぎる！

本当はすぐにでも、掻っ攫いに行きたいとこやけど、和葉は善意でやっとなるんやから、それを尊重して、話が終わるのを待った。

話はすぐに終わったようので、和葉は手を振りながら去ろうとしている。

しかし、この下心男が何だかんだと引きとめ、拳句、爽やかな笑顔で  
「この後……。」

と誘おうとした瞬間、

「……和葉。」

オレは後ろから低い声で和葉を呼んだ。

ぱつと振り向き、オレに満面の笑みを見せた和葉は、すぐに怪訝な顔付に変わった。

下心男は、オレの凶悪な顔にびびったのか、いつの間にかいなくなっている。

「平次？」

訝しげに声をかける和葉。

「……もう終わったんか？」

低い声で答えるオレ。

「う、うん……。でも、どしたん？顔怖いで？」

はっはっはー！。そーかそーか、顔が怖いか。そりゃ、当たり前じゃつ。

オレは怒りを隠さずに、和葉の手をとる。

「……平次、痛い。」

「痛うしとるからな。当たり前や。」

ぐいぐいひっぱり、地下の駐車場に和葉を連れ込む。そして、人目につかない所の壁に押し付けた。

「何でや？」

「な、何？」

「あの男、何なんや？」

和葉が怯える。

オレはわかっている。

オレが本気で怒ると、小悪魔和葉は降臨しない。

びくびくオレの顔を伺う和葉の頭上に右腕をあて、左手で体を抑え、和葉を閉じ込めて、上から見下ろす。

不穏な空気を感じたのか、和葉が慌てだした。

「ちよつ、待って平次。あの人、お店の場所聞いてきただけやで？」

「ほー。」

「ほんまやつて。」

「ほいで・・・店までついていったと。」

「そう。」

「ふん。」

かりつ 耳たぶを噛む。

「ひゃんっ」

「ま、そんなことだろうとは思ってたけど・・・」  
ちゅっ

「あんっ」

「目の前で見ると・・・」  
ぺろっ

「あぁっ」

「むかつくねんなぁ。これが。」

和葉に次々悪戯を施す。

薄着していた和葉の服は、かなりはだけてきた。

(ちゅっ、こんな薄い服きやがって)

ますます頭に来て、悪戯に熱中する。

「へ、へいじ……ここ誰か来そう……やめて……。」  
和葉が泣きそうな声で言う。

「へ」

「んんっ」

「新幹線だろうが、どこだろうが……。」

「やっ」

「オレの事、弄り倒す和葉ちゃんがよう言うなあ。」

「ああっ……やんっ……やめっ。」

和葉が潤んだ目でオレを見つめる。

「へ、平次……もうやめっ……やんっ……はううっ……」

「それは、いくら和葉のお願いでも無理な話やな。」

和葉の哀願に、機嫌をよくしたオレは、愛撫の手を強める。

和葉の喘ぎ声がいっそう大きくなる。

「和葉ちゃん、声大つきいなあ。そや、オレの左手の指舐めて？オレ、これされるの好きなんよなあ。」

くぶっ口の中に指を入れる。

和葉は素直にしゃぶりはじめた。

背筋がぞくぞくする。

「くくっ。結構くるなあ。それ……。」

オレはさらに和葉を責めた。

和葉の声が一段と大きくなり、慌てて、口に指を入れる。

「くくっ……んんんんんっ。」

和葉がくったりなったのを見て、オレは和葉を解放した

「和葉、わかつたる？」

コクン

「オレをあんま妬かせるなや。」

コクン

「ほな、帰って本番やるか！」

コクン

火照った体に、バイクの振動は酷かった・・・。

## オレの逆襲（後書き）

以前「限定深夜版 平次の逆襲」として投稿したものの、平次サイド。前のは和葉サイドで、それはそれは表現がすごかったので、ライトに書き換えました。「限定深夜版」一晩で消したから、覚えて頂けてるかなあ？

逆襲の果てに（前書き）

『オレの逆襲』の続き。平次が攻めます！

## 逆襲の果てに

オレの家には、誰もいなかった。

バイクから降りれなかった和葉を抱きかかえると、部屋に運ぶ。普通の和葉のはずなのに、上気したやらしい顔をして、珍しく自分から激しくキスをしてきた。

「ふっ。和葉ちゃんに、小悪魔が降臨したんかな？」

オレが笑ってちゃかすと、和葉は恥ずかしそうにオレの胸に顔を埋める。

(・・・かわええ・・・ほんま、たまらんで、この女・・・)

部屋につくと、どすっ 乱暴にベッドに落とされた。

「きゃっ。」

和葉がうつ伏せになる。

そのまま、上から覆いかぶさると、和葉の耳元で囁いた。

「でも、今日という今日は許さんで、和葉・・・。」

オレは、宣言どおり、じっとりねっちりやらしく和葉を抱いた。

多分、荒々しく抱かれると思っていたのだろう。

和葉が焦れたように、何度もこっちを見るが、オレは相手にしない。

ゆっくりゆ〜っくり和葉がよく鳴くところを責め抜く。

甘い快感が辛いのか、何度も何度も泣いてオレにすぎる和葉。

・・・でも、まだ、オレは許さない。

「・・・まだまだやで・・・和葉ちゃん。」

和葉の声が掠れて、もう声がでなくなってきた。

オレはそれでも、責め続ける。

何度目かの絶頂を迎えた時、和葉の意識が飛びそうになった。

(・・・もう限界かな・・・)

オレは、和葉の耳元に口を寄せると、

「和葉・・・お前はオレのもんなんやで・・・愛しとる・・・。」  
そう囁いた。

・・・でも、愛しい和葉から返ってきた言葉は・・・

「・・・覚えとき・・・。」

だった・・・。

オレは思わず正座した。

## 逆襲の果てに（後書き）

逆襲版終了。次は逆襲の逆襲です。

仕返し（前書き）

『逆襲の果て』の一週間後。

## 仕返し

ある夏の日……

オレは久々和葉を思いっきり抱いた。(弄り倒したとも言っ)

それ以来、事件や何やで、和葉には会うつらんやった。

……一週間後、オレの部屋にやってきた和葉は、まだ声が掠れていた。

「ひ、久しぶりやな……和葉。」

「そやね〜。」

「声……掠れとるな……夏風邪か？」

「親にはそういうことにしとるけどな……。」

……やっぱあの時、鳴かせすぎたせいや……

和葉の静かな微笑が怖い。

(……覚えとき……)

気を失う寸前に言った和葉の言葉が、脳裏に蘇る。

「で。」

「で？」

「今日はそのお礼参りにな……。」

うふふ。和葉が妖艶に笑う。

(ひいついきなり全開やつ。)

ぎしっ

ベッドの上で、和葉に襲われる形になる。

「選んで？」

「な、何が？」

「この間、平次がアタシにしたように、じっくりみつちりがええ？  
それとも、いきなり激しくがええ？」

「・・・い、いや・・・どっちも・・・ちよっと・・・」

オレの答えを聞いて、和葉はにっこり微笑んだ。

「なぐんや！やつぱりどっちもして欲しかったんやな！」

「ちちちち、ちがっ」

「・・・下におばちゃんおるから、じっくりは場所を変えてやった  
げるな。」

耳元で囁かれた時には、オレはTシャツを捲くられていた。

「いやっちよっ和葉。」

「・・・おばちゃんに聞こえるで？」

「ひゃっ・・・あっ・・・やめっ。」

思わず大声出したオレの声が聞こえたのか

「平次く？」

下からオカンが声をかけてきた。

「な、何や。」

平静な振りをして、返事をする。

「あんだ大声出して何してんの？」

「和葉とゲーム！」

必死で答える間も、和葉は悪戯を止めない。

「そう？あんだ、和葉ちゃんに悪さしたら、お母さん、許さんからな！」

「な、何言つとん！」

(襲われてるのは、あんだの息子やつ！)

・・・なんてことは、とても言えない・・・

「和葉ちゃん。」

「はい。」

「おばちゃん、これから出かけるから、ゆっくりしてってな。」

「はあい。おばちゃん、いつてらっしゃい。」

やってることと、可愛い声が全く合っていない和葉は、オレを見て、ニヤリと笑った。

「・・・んふふふ。両方できそうやな・・・。」

かぶつ　オレは耳たぶを甘噛みされた。

「ひうつ」

「さあ、今日は平次に思いっきり鳴いてもらつてえ・・・。」

パキパキ 和葉が指を鳴らす。

「やーめーてー……っ」

……次の日、オレの声は掠れていた……

## 仕返し（後書き）

深夜版では、相当いじめられた和葉ちゃんですが、それ以上に、仕返ししました（笑）

ご主人様あ

「やめっ・・・和葉あ・・・」

「どしてえ？かわいいで？平次。」

「・・・和葉をいじめ倒して鳴かせたお詫びに連れてこられて場所は・・・」

「何で、オレがこんな格好しなくちゃいかんねん！」

「・・・コスプレができるラブホやった・・・」

「ええやん。メイド服。似合うで？」

「いややっ！」

「でも、この間、『ご主人様何とか』っちゅう、HなDVD見とっ  
たやろ？」

「なななな、何でそれを・・・」

「デッキに入りっぱなしやった。平次おらんから、テレビでも見よ、  
思うてつけたら、メイドさんが喘いでて、びっくりしたわ。」

いやらしく笑いながら和葉が言う。

「い、いや、メイドが好きなんじゃなくて・・・」

あのAV女優がお前に感じが似てるから、気に入ってます・・・と  
は、とても言えないっ。

（何されるか、わからん。）

「んっ？」

「いや、何でもない……。」

そういう間にも着々とコスプレさせられる。

「はいつできた!」

「……。」

鏡に映った自分の姿を見る。

……何かやらしー気分になってきた……

それに勘付いたのか、和葉が嬉しそうに笑いながら、後ろから悪戯をしかけてくる。

「……うふふ。もう感じてるやん……。」

「やっ……あっ……。」

「とりあえず、今日はアタシがご主人様な。」

コクン

オレは頷き、かわいいご主人様の言い成りになることにした。

「やっ……ご主人様……そんなことっ……ぎゃー……」

「ーっ」

……教訓 かわいいご主人様は情け容赦ない……

ご主人様あ（後書き）

「仕返し」の翌日。この2人は夏バテ知らず。

美味そうな女（前書き）

海に遊びにきた和葉たち。そこで平次が・・・

## 美味そうな女

夏・・・熱い太陽・・・そして海

男達の邪な視線を気にも留めず、砂浜ではしゃぐ派手な水着の女。

「へーえーじー」

女がオレに手を振る。

・・・だあっ！わかったから、思いつきり手を振るな！胸が見えそうに思えるっちゅうねん！

オレの気も知らず、ぴよんぴよん跳ねながら、手を振っている。それに手を振り返しながら、その美味しそうな女の無邪気さに、オレは、がっくり頭を垂れた。

・・・

今日オレ達は、高校の友人達と海にきている。

海となれば、当然、オレの得意の水着当ての披露になるわけで・・・

「・・・すげー服部・・・。」

「お前、何か気色悪う。」

友人の賛辞(?)を受け、気を良くしたオレは、今日一緒に来た女達の水着も当てだした。

「・・・ほいじゃ・・・遠山は？」

「和葉かあ？多分・・・オレンジのビキニ。」  
「ほんまや・・・」

振り向くと、待ちわびた和葉の姿。

当たってましたよ・・・ええ、当たってたさ！

でも、何でそんなに布の表面積が小さいねん！

和葉の姿を見て、くらつとめまいがする。

後ろにはすでに何人が男がついてきとるし。

「・・・お前、何やねん！その格好は！」  
和葉の耳元で囁く。

「はあ？水着や！？アンタ目大丈夫なん？」

「そんなんわかつとるわい！何か羽織れやつ。」

「何でっ？」

「何ででもやつ！」

「・・・暑いからイ・ヤ！」

ぶいっつと横をむくと、和葉は先に行っていた友人のもとに駆け出した。

ああああ。走るなあ！乳が乳が・・・揺れるやないかあ！

そして、今。

人の気も知らず、この女はビーチバレーなんぞ楽しんどる。

おまけに、やったら運動神経がいいから、動きも素早い。

・・・それがまたやらしいっちゅうねん！

(くっそー・・・んっ？何やあのカメラは!?)

少し離れたところで監視していたオレは、ギャラリーでカメラを構えるヤローを見つけた。

「・・・おい兄ちゃん・・・。」

ぽんっ肩に手を置く。

「はははは、はいい・・・。」

排除終了。

さっきからこんなんばっかや・・・。

やっとビーチバレーが終わって、和葉らがこっちへ戻ってくる。

海なのに・・・いちゃいちゃする予定の海やったのに・・・全っ然、楽しくない・・・。

ぶーたれて、寝転んだ。

ふと顔に影が差した。

「へえじ」

「・・・何や。」

ふてくされて返事をする。

「一緒に泳ごつか？」

「・・・イヤや。」

「せっかく来たのに・・・。」

ちらつと和葉を見る。

悲しげに顔を傾ける姿がまた堪らない。

「……………」

「泳ご？」

「……………おう。」

オレ達は、海に向かって走って行った。

この時、オレは嫉妬にかられて、和葉の呼び方に気付いていなかった……。

## 美味そうな女（後書き）

和葉が小悪魔な呼び方をどこかでしています。平ちゃん、気がつかず、警戒0です。

美味しいオレ（前書き）

海の中です。

## 美味しいオレ

「気持ちーなあ。」

「そやな。」

沖で2人でぶかぶか浮かぶ。

和葉は浮き輪。

オレはそれにつかまっている。

「なあ、平次？」

和葉が振り向いた。

「何や？」

「・・・堪らんかったやろ？」

くすり。和葉が妖艶に微笑む。

「なななな、何が？」

「アタシの姿。堪らんかった？」

「べ、別に。」

「そう？」

振り向いたまま、オレの頭に手を回し、舌をちよつとだけ絡めるキスをする。

「・・・ちよつ・・・。」

慌てるオレに構わず、和葉はオレの頬を撫でながら話す。

「アタシは堪らんかったで？」

「・・・何が？」

「平次の姿。」

くりん。オレの方に向き直る。

「・・・触れたくて、触れたくて・・・。」

っっ。和葉の手がオレの肌を滑る。

「・・・くっ・・・。」

「キスしたくて・・・。」

やらしいキスをしながら、和葉の足がオレの足に絡みつく。

「ちよっ・・・和葉っ。」

ちゅっ

「アタシのもんやって言いたくて・・・。」

ちゅるっ

和葉がもう一度軽いキスをする。

そして、体が離れた。

オレは拍子抜けして、口をぽかんと開けてしまった。

「・・・そ、そんだけ？」

「うふふふ。もっとしてほしい？」

「・・・。」

「してほしい？」

「・・・うん。」

「こっちききて？」

オレは和葉の浮き輪の中に入る。  
ぴとっ 柔らかい体が絡みついた。

もう堪らず、噛み付くようなキスを繰り返す。

ちゅっ・・・ちゅぱっ・・・ちゅっちゅっ・・・

「はあっ・・・あんっ。」

「か、和葉・・・」

「な・・・ん？」

「もう、我慢できんのやけど・・・。」

「我慢して？」

「はいい？」

かぷっ

耳を甘噛みされる。

「くっ。」

「色々触ってあげるから。」

ちゅっ　ちゅっ

「・・・へっ？やっ・・・あっ・・・」

くりっ　ちゅっ　ちゅぱっ

「やっ・・・くっ・・・ひゃんっ」

「大きな声出したら、みんな寄ってくるぞ？」  
和葉が楽しそうに笑う。

「・・・やって・・・ひゃっ。」

「んふふふ　かわええなあ。平次は。」

「そっそこやめてえな・・・やっあっ・・・あああっ。」

「どこまで、我慢できるかな？へ・え・ちゃん？」

「おまつ、やめいっーーーーーあっっっ・・・」

「ふふふ。」

「もう、や~~~~め~~~~て~~~~。」

・・・数分後、ぐったりしたオレが海上に浮いた。

「うふふ。気持ちよかった？」

「・・・拷問やった・・・。」

「ふふつ。またまたあ。でもな・・・」

和葉が耳元で囁いた。

(・・・アタシも限界やねん。やから、人のいないところ運んで?)

ざばーんっ

オレは一気に起き上がった。

「うおおおおおお。」

凄い勢いで浜辺まで泳ぐと、和葉を抱えて猛ダツシユで砂浜を駆け抜けた。

・・・夏、最高っ！

オレは最高に輝いていた・・・。

美味しいオレ（後書き）

続きは、今夜深夜の「夜の平和な週末で」（笑）

おまけ(前書き)

走っていった後、シャワー室にて

## おまけ

シャワー

シャワーの水が流れるままにし、オレと和葉は向かい合って居た。顎先を指で捕らえ、上向かせにした和葉の唇に、自分の唇を重ねる。

「あぁっ……んっん……」

和葉のため息のような吐息がオレの脳を揺らす。

オレはますます激しく和葉に口付けた。

しばらくすると、もうどうにもこうにも我慢できなくなって、和葉の中にいきなり入る。

「……!んっ……ふぁっ……へ……いじい……」

「く、苦しいんか?和葉?」

ふるふるふる 首を横に振る和葉。

「シャ……シャワー……止めて……」

「な……んで?冷たいん?」

オレにしがみつく和葉。

「……水がじゃま……」

「……?止めたら声が聞こえるぞ?」

「・・・平次の声・・・聞きたい。それに・・・」

和葉が潤んだ目でオレを見上げた。

「アタシと平次の間に、水があるのさえもイヤ・・・。」

ぷっんっ

オレの何かが切れた。

があああああつ。かずはああああ。何てかわいいねん！お前！  
もう食ってまうぞ！あ、食ってるか。

あつ、ちよっもうつオレっ我慢ならんっ・・・って、あつ・・・あれっ？

「・・・あううう・・・」

・・・ひよっとして、最短記録？

不本意な結果に終わり、

「しゅめ・・・」

と気まずく和葉を見ると、それはそれは妖艶に微笑んでいた。

「次はアタシの番やね・・・。」

ひえええええええ・・・さっきのかわいい和葉は何処！？

「……ぴいつ……」

「……はいはい、へえちゃん。ちよつくと静かにしようなあ。」

「ぴえつ……だめっ……あつうつつ。」

「うふふふ。」

帰り道

「和葉が元気になってよかった。」

「みんな心配掛けてごめんな。」

にこやかに笑う和葉。

「……服部、お前大丈夫か？」

「何や、顔色悪いで？ドス黒いつちゅうか……。」

「遠山看病してたお前が、何でそんな疲れてるねん？」

「……聞かんでくれ……」

つやつやしている和葉を恨めしそうに見ながら、オレはため息をついた。

「夏って……辛いな……。」

「はあ？」

オレの夏……はよ終わってくれ！

おまけ（後書き）

おまけ。さっき思いついて書きました。

## 覗く女（前書き）

「本能」「放課後の秘密」に出てきた一年生の女の子が主人公です。  
「放課後の秘密」の直後の話。

## 覗く女

「……ちよつ和葉……もう、やめてえな……。」

……放課後の教室から漏れ聞こえてきた、服部先輩の声。

服部先輩を探していたうちは、迷わずその教室を覗いた。

すると……そこには……そこには……、半分制服が肌蹴て座る服部先輩の上に乗った、遠山和葉！

(えっ？何？何で？)

うちは腰を抜かさんばかりに驚いた。

(ふふふ、ふつー、男の人が女の人を襲うんじゃないん!?)

食い入る様に見つめてしまう。

肌蹴た制服の服部先輩は、男なのに、色っぽい。

(せせせ先輩の、あの、あの、あられもない姿……鼻血出そうや……)

今にも叫びだしそうな自分の口を、自分で抑える。

すると、遠山和葉が服部先輩の耳元で何か囁き、先輩の頬を手で包み込むと、上からキスをした。

(ひゃーっ女からキスするんかい!?)

服部先輩の手が、遠山和葉の細い腰に回る。

キスはだんだん深くなり、2人はお互いを貪る様にキスをしている。

(・・・やらしー・・・)

2人の濡れた唇が、夕日に光って、やらしいけど、綺麗に見えた。

嫌なのに、大好きな服部先輩のキスシーンなのに、目を逸らすことができない。

その時、

ちらっ

遠山和葉がこちらを見た。

そして、その目が三日月のように細まる。

(・・・この人・・・気付いとる・・・)

あまりの衝撃に手の力が抜け、

ガタンっ

鞆が下に落ちた。

その音に、服部先輩もちらっところちを見たが、うちに気がついたにも関わらず、また、遠山和葉とのキスに夢中になっていった。

ダッ

うちは思わず駆け出した。

ポロポロ涙があふれる。

（何なん！何なんよ！うちがいるのに気付いたのに！2人して、眼中になんかなくて！バカにしとるん！）

はあはあはあ。校舎裏に駆け込み、涙をこする。

恋愛経験がなく、漫画とかの世界でしかラブシーンを見たことがないうちには、あの2人の世界は衝撃過ぎた。

（ム力つく・・・あの女・・・あばずれ女・・・ム力つく・・・）

怒りがむらむら沸いてくる。

（あんなやらしい女、先輩には合わん・・・そうやっ先輩は騙されとるんや・・・絶対、絶対、奪ってやるっ）

服部先輩の隣にいただけで嫌いだった遠山和葉が、うちの憎悪の対象になった出来事やった。

## 覗く女（後書き）

「放課後の秘密」の一年生の女の子サイド。相手にもされず、怒つてます。彼女。

## 狙う女（前書き）

一年生の彼女頑張っています。

## 狙う女

「服部先輩おはようございます!」  
「うちは自分の中でマックスにかわいい(と思われる)笑顔で、挨拶する。」

「おう。おはようさん。」  
先輩はいつもちゃんと挨拶を返してくれる。

(・・・ああ、今日もカツコええ・・・)

これがないと、うちの一日は始まらない。

あの日・・・遠山和葉からコケにされた日から、うちは積極的に出ることにした。

(あんなあばずれより、うちの方が絶対いいはず!何せ、まっさらやし。)

待ち伏せ、マネージャーの真似事、強引なスキンシップ・・・

でも、それは、ファンの子はみんなやつてることで・・・  
服部先輩が、うちの顔を覚えてくれるのかすら怪しい・・・。

(・・・これは・・・そろそろ、あの女の本性を思い知らせた方がええかもな。)

思いたすのは、あのやらしい光景!

見とれ〜遠山和葉！

とりあえず、クラスメートの男子に男心をリサーチした。

「なあなあ。」

「何や？」

「自分を襲う彼女ってどう思う？」

「はっ？」

「いや、だから、積極的に自分にやらしいことする彼女ってどう？」

「・・・オレは、いやかなあ？」

がたんっ立ち上がる。

「そうよなっ！」

「あ、ああ・・・やっぱ、男やから、自分からガンガン行きたいし。」

「

「そうそう！そう思うよなあ！」

「何の話や？」

他の男子生徒も話しに加わる。

その話を総合すると、やっぱり遠山和葉のような彼女は嫌がられる  
つちゆうことがわかった。

「んふふふ。ほうかほうか。」

「何や、自分。気持ち悪いなあ・・・。」

「いやいや、そうやるうな。と思ってな。」

につこり微笑むうちに、横から爆弾が飛んできた。

「でも、例外があるで？」

「はっ？」

「2年の遠山先輩！」

「ああ？あの人が何なん？」

急にあの女の名前が出てきて、テンションが下がる。

「あの人にやったら、オレ、弄られてええ！っちゅうか、むしろ弄  
らりたい！」

「はあ？」

「あつ、オレもオレも！？」

「あの猫みたい大きな目で、見つめられながら、悪戯されたいっ  
！」

「踏まれてみたいっ！」

・・・死ねや・・・アンタら・・・。

うちは、腕を組んで歩きながら考えた。

（服部先輩もそうなんやろうか・・・？いや・・・あんな男らしい  
先輩なんやから、イヤに決まっとする！そうやっ！うちが先輩のイメ  
ージを守ってやらないかんねん！）

また勝手な妄想に燃えたうちは、新たな行動に出ることにした・・・。

それが、あんなことになるうとは思いもしなかった。

服部平次の逆鱗に触れようとは・・・。

狙う女（後書き）

彼女頑張ってますよ。ほんと。平次にとって、和葉以外は全部「ねーちゃん」なのね。

## 踏んだ女

「服部先輩！」

「んっ？ああ・・・誰やったっけ？」

（・・・まだ、名前覚えてないんですかい？）

うちはがくつとしながら、でも笑顔で続けた。

「一緒に帰ってええですか？」

「ええけど・・・。」

服部先輩は優しいから、こんな暗くなつてからの誘いは断らない。それを承知で、こんな時間まで待ち伏せていた。

しばらく2人で無言で歩く。

うちは思い切つて、かねてからの疑問をぶつけることにした。

「・・・先輩は・・・。」

「あん？」

「何で、遠山先輩なんかと付き合ってるんですか？」

「はっ？何で？」

「いや、合わないなと思つて・・・。」

「へっ？そうか？どこが？」

服部先輩は心底意外という顔をして、うちを見た。

うちはその顔にいらつとして、思いっきり捲くし立てた。

「・・・やって・・・あの人が、やらしいじゃないですか？この間、うち、見ました！先輩の上に乗かって・・・あんな、やらしいこと・・・。ふつーの女はせんでしょ？そないなこと・・・。あばずれじゃないですか？あの人が。先輩だって、あんな襲われるのイヤでしょう？幼馴染やからって遠慮せず、はっきり言った方がよいのですか？どんな男でも、あない女は嫌なはずですね。先輩のイメージに合いませんっ！」

はあっはあっはあっ  
肩で息をする。

服部先輩を見ると、無表情でこっちを見ていた。

「せ・・・先輩？」  
ぶるっ

その冷たい視線に、思わず震える。

「・・・なあ？」

先輩の低い声が聞こえてきた。

「・・・はい。」

「オレのイメージって何？」

「そ・・・それは、男らしくてカッコいい・・・です。」

「・・・ふーん。それは、誰が作ったん？」

「えっ!？」

「お前が勝手に作ったんやろ？それに合わんやら、何やら、迷惑な  
んやけど。それにな・・・。」

服部先輩は、静かに続ける。

「お前が和葉の何を知つとんねん。和葉を一番知つとるのは、このオレや。バカにすんなやつ。」

最後は怒鳴られた。

・・・怖い・・・怖い・・・怖い・・・涙目になる。

うちは、服部先輩の逆鱗に触れてしもうた。思わず、後ろに一步下がった。

そんなうちを可哀想に思ったのか、服部先輩は口調をちよつと穏やかにした。

「ま、これに懲りたら、オレらの事に口挟まんとしてや。オレはな・・・和葉にべたばれやから、何されても嬉しいんや。それがイメージに合おうが何しようがな。わかったかっ！和葉っ。」

・・・はっ？和葉？

とっさに振り向くと、建物の影から、遠山先輩がおずおずと出てきた。

「・・・何でわかつたん？」

「お前の気配ぐらいすぐわかるわ。さっきの信号のとこで、オレらに気がついたんやろ？」

そう言って、やさしく遠山先輩を引き寄せた。

ちらっ

こっちを見た遠山先輩は目が赤かった。

・・・ああ、うちはこの人を傷つけてしまった・・・2人のこと何も知らんくせに・・・

「ごめんなさいっ。」

うちは泣きながら、2人に頭を下げた。

「何も知らんくせに・・・えらそうなこと・・・遠山先輩、本当にごめんなさいっ。」

遠山先輩は困った顔をしている。

「・・・いや・・・謝られてもアタシ・・・。」

うちはまた頭を下げる。

「うち・・・ただ嫉妬してただけなんです！あの時のお2人がやらしいけど、キレイで・・・本当すみませんでした！」

服部先輩は、照れているのか、横を向いて頬を掻いている。

「遠山先輩にも・・・本当は憧れてたんです・・・きつと。でも、こんなキレイなのに・・・嫌いにならないと・・・うち・・・うち・・・我慢ができなくて・・・。」

ひっく

しゃくりあげた瞬間、

カチっ

何かの音がした。

(カチッ?)

思わず顔を上げると、妖艶に微笑む遠山先輩と、青ざめる服部先輩  
がいた・・・。

踏んだ女(後書き)

逆鱗に触れて、地雷を踏む女。

## へたる女

「・・・アタシに憧れてたん？」

くいつ 顎を掴まれる。

目の前には、妖艶に微笑む遠山先輩。  
後ろには、うちを睨む服部先輩。

なんで、こんな状況になったんやろ・・・。

うちは初めとは違う意味で涙目になった。

・・・数分前。

涙ながらに2人に謝っていた時、何か力ちつと音がして、顔を上げると、遠山先輩の表情が変わっていた。

「えっ？ なっ遠山先輩？」

・・・さっきまで、泣いてませんでした？

状況についていけず、慌てふためくうちに、すっと近づいてくると、顎を掴まれた。

「・・・アタシに憧れてたん？」

間近で見た遠山先輩は、本当にお綺麗だった。

「は・・・はい。」

思わず、どもってしまっ。

その答えに、にっこりと先輩が笑う。

「ふーん。名前は？」

「あ、あの・・・田中・・・洋子です。」

「洋子ちゃん、言うん？で、洋子ちゃんは・・・あの『やらしー』キスが忘れられなくて、アタシを嫌ったんやね？」

遠山先輩は『やらしー』を強調して言った。

「そ・・・そうだと思います。」

「うふふふ。」

先輩は綺麗に笑った。

先輩の醸し出す色香にくらくらする。

「洋子ちゃん？」

「はっへっ？はいっ。」

「・・・本当は、ああいうのしたいんやろ？」

「はっ？」

「本当は、ああいうキスがしとってしとって、頭から離れんかったんやろ？」

っっっ頬を撫でられる。

「ひゃいっ。」

背筋がぞくぞくする。

「教えてやるっか？アタシが。」

ひいひいひいっ。興味あるけど、結構です。

うちがあまりの衝撃に口が利けないでいると、

「和葉っ、ええ加減にせいっ。」

横から服部先輩の声が飛んできた。

その顔を見たらうちは、腰が抜けそうになった。

(・・・絡む遠山先輩にやのうて、触られてるうちに怒ってる・・・ひいひいひい。)

「なあん？へえじ？」

不満そうに返事をする遠山先輩。

「もう帰るで。」

「ちよお待ってえな。」

もう一度こっちに向き直ると、また顎を掴まれた。

「洋子ちゃん・・・。」

「・・・はい。」

「ごめんなあ・・・平次はもう諦めてもらえる？」

コクコクコク

うちは何度も頷いた。

あなたには誰も敵いません。

「ありがとう・・・。平次はやれんけど・・・。」

ぷるんっ

指で唇を弾かれた。

「アタシはいつでも、相手するでえ。ほなな。」

にっこり妖艶な笑みを浮かべた遠山先輩は、うちがみたことある先輩の中でも、一番きれいやった……。

その場にへたり込んで、2人を見送る。

しばらくすると、遠山先輩が服部先輩をひっぱり、キスをしている姿が見えた。

それに嬉しそうに照れている服部先輩。

(……ははは……べたべたって……ほんまやな。女の子にも妬くくらいやもんな……。)

服部先輩は憧れのままが一番ええ。

……でも……

あの妖艶な笑顔が頭から離れんねん！  
どうしてくれるんですか！？遠山先輩！

へたる女（後書き）

小悪魔流、威嚇・牽制。ちよつと妖艶にやってみました。

## その後（前書き）

平次サイドのお話です。

## その後

訳分からん後輩に絡まれた帰り道。

くいくいつ和葉に引つ張られて、横を向くと、いきなりキスをされた。

・・・何だかんだいって、かわいいんやから・・・  
オレは思わずにやける。

にしても・・・

「なあ。和葉。」

「何？」

「さつき・・・いや、お前・・・ひょっとして、女もいけるん？」

「はあああ？何言うとん？」

「いや、さつきの女にえらくご執心やったちゅうか、なんちゅうか・・・。」

「アホな事いいなや！アンタに近づかんように牽制しただけやる？」

「（牽制！？アレが！？）いや・・・そうは見えんかったで？（むしろ、楽しんでたみたいな・・・？）」「

「ふん。ま、でも・・・。」

「でも？」

「平次は何をしても、アタシが好きなんやね。」

「・・・何回も言うとるやないか。」

「アタシも好きやで。平次。」

んふふふ。和葉が嬉しそうに笑う。



「な、何でも・・・何でもないっ。」

ひっくひっくひっく  
肩が揺れる。

オレ・・・オレ・・・もうお婿に行けないっ  
責任取れや！和葉っ！

「わーーーーん。」

オレの泣き声が空に消えていった。

### 【おまけ】

「あのな・・・。」

「何や？」

「この間言ってた、攻める女の話。」

「ああ。」

「うちも遠山先輩にやったら、攻められたいわ・・・。」

「はあああっ？お前何言うてん！？」

「いや・・・何や言いたかっただけ・・・。」

はああああ 物憂げにため息をつくとき、うちは席についた。

( ああっ、あのキレイな赤い唇が頭から離れんっ )

うちは、まっとうになれるんやろうか。

それだけが心配や・・・。

## その後（後書き）

「VS」おしまいです。和葉ちゃんの妖艶さが出てたでしょうか？  
どうライバル考えても、こんな才子で終わっちゃうんですよね・・・  
。

## 骨抜き（前書き）

「平和な週末」の同時掲載、小悪魔版『和葉らぶ』。

## 骨抜き

「か、和葉ちゃん？」

「何？」

「オ、オレ、着替えるから、ちょっと離れてくれん？」

「んふふふ。手伝ったげる。」

「い、いや、けけけ結構です。」

「またまたー。」

和葉が嫣然と笑って、オレに手を伸ばす。

ぶちぶちぶち

器用にボタンを外し、するっとランニングの下に手を入れる。

「くっ……和葉やめいっ……。」

ちゅっ

いきなりキスをされる。

「下におばちゃんおるから、騒ぐとばれるぞ？」

「お前が何もせんかったら、ええんやん！ってどこ手を伸ばしてんねん！やめっ……あっ……。」

トントントン

「平次〜」

うわっ。オカンや。

慌てたオレは、ぱっと和葉の体を離す。

反動で和葉がベッドに倒れこみ、オレがその上に乗っかってしまった。

や~~~~ば~~~~い~~~~

がらっ

「平次？」

.....しーん.....

オレ.....逃げてええ？

凄まじい殺気が、入り口から漂ってくる。

「アンタって子は！和葉ちゃんに何してんのっ!？」

ピシーン 鉄扇が額に飛んできた。

「いや、あの.....」

言い訳するオレより先に、和葉が泣きながらオカンに縋りついた。

「違うねん。おばちゃん。アタシが悪いねん。アタシがふざけて.....平次は何も悪うないねん!」

「.....和葉ちゃん.....」

オカンは和葉を優しく抱きしめ、絶対零度の視線をこっちに向ける。

「へいじい.....アンタって子は」

「やつちよっ.....。」

「静、どないした？」

・・・オヤジ・・・今日に限って帰ってくるの、早ないか・・・

「あ、あなた。平次が・・・。」

「おつちゃん、違うねん。アタシが女のくせに・・・平次は悪うないねん。」

オヤジにも継る和葉。

涙目の和葉。シャツの肌蹴たオレ。怒るオカン。

その三者をさつと細い目でみたオヤジは、

「平次いつ。竹刀もって、外に出えつ。」

そう叫んだ・・・。

・・・30分後。

「ひつくひつくひつく。」

オレの傷の手当をしながら、泣きじゃくる和葉。

「ごめつ。本当にごめん。平次・・・。アタシのせいだ・・・。」

オレは和葉の頭を優しく撫でる。

「もう、ええって・・・ちゅうか、今度から、こんな時、オレのと庇わんでええから。」

「?何で?本当のことやん。」

・・・それが、余計オレの立場を悪くするねん・・・。

「それより・・・。」

ちゅっ 和葉の目尻にキスをする

「何？」

「もう・・・親のおる時、いたずらすんのやめて・・・。」  
「わかった・・・なるべく静かにやるな？」

涙目で首をかしげて、にっこり笑った和葉はかわいかった・・・。

つて、違~~~~~う。

「んじゃ、傷の手当続けるな。」

「ちよっ、あつっ・・・もうっ、傷舐めるのやめてえなっ。」

「これが一番早く治るんやて。」

「くっ・・・あぁっ・・・うっ・・・そ、そんなとこ怪我してないつて。」

「うふふふ。」

ああ〜ああ〜ああ〜。気持ちいい。・・・じゃなくて・・・お前、ちったあ、反省せいっ！

ぺろぺろぺろぺろ

ああ・・・力が入らん〜

「ちっ・・・あっ・・・あっあっ・・・あああああ。」

.....

えぐえぐえぐ

「オ、オレ・・・お前がわからん。あ、あんなこと、あ、あつたんに・・・。」

「傷の手当、しただけやん！ほら、もう泣かんの！」

ちゅっ 和葉が優しくキスをしてきた。

・・・まっ・・・えっか・・・

和葉の細い腰を抱いて、深いキスをする。

あのオヤジからも、庇ってくれようとしたしな・・・。

「おおきに。和葉。」

「ううん。本当にゴメンな。平次。」

ちよっと涙目でオレを見上げる和葉。

うわああああ。かわええっ。かわええから、許すっ

・・・夜、晩御飯が何故か豪勢だった。（珍しくご相伴にも預かった）

ウチの親も、よくわからん・・・。

## 骨抜き（後書き）

晩御飯が豪勢なのは、お祝いつちゅうことで。両親は、相当喜んでます。なんせ、和葉ちゃんに骨抜きなもんで。

## 仕返し指南(前書き)

工藤新一の場合

## 仕返し指南

「それ・・・ひどいなあ。工藤君。」

「でしょ？もう、本当に人のこと好き勝手して・・・。」

今日、和葉ちゃんたちが東京に遊びに来てくれている。

新一達は、リビングで事件の話ばかりしてるから、私達はキッチンでガールズトーク。

最初は惚気だったんだけど、だんだんヒートアップして、とうとうアッチの方の愚痴に・・・。

「蘭ちゃん、優しいからなあ。」

「・・・そんなこと、ないよ。この間、あんまり頭にきて、裏拳してやったし。」

「裏・・・拳？」

「うん。もうやだつて言うのに、まだその気だったから。だって、一晩中どころか、次の日のお昼までだよ？そのくせ、ご飯作れとか言うし・・・。」

カチッ

・・・あ、やばっ、和葉ちゃんのスイッチ押しちゃった。

「・・・蘭ちゃん・・・。」

「な、何？和葉ちゃん。」

「それ、いつペン締めたほつがええんちゃう？」

「そ、そっかな？」

ふわっ　和葉ちゃんが妖艶に笑って、私の頬に優しく手を添える。

「蘭ちゃんがやめてっってお願ひしてるのに、歓んでるって勘違いしてる上に、ご飯まで作らせようとするおバカさんにはな・・・同じ目に遭わせてみればええねん。」

和葉ちゃんの色っぽい唇から目が離せない。

「それって・・・どうやって？あ、でも、新一って仕返ししそうだし・・・。」

「大丈夫。アタシに任せて・・・。」

うふふふ。妖しい笑顔を浮かべて和葉ちゃんは私に耳打ちすると、キッチンを出て行った。

がちゃ

ドアを開けて、2人で入る。

すぐに和葉ちゃんの異変に気付いて、慌てる服部君と、何事って顔で振り返る新一。

「かかか和葉、どないしたん？」

「んふ。工藤君にちよつとな・・・。」

そう悩ましげに言うと、  
くいつ

新一の顎を和葉ちゃんが掴んだ。

「な、何？和葉ちゃん？」

新一の顔が怯えてる。わー超レア！

「んふふ。なあ、工藤君。」

っ

顎を掴んでいた和葉ちゃんの手が、新一の首筋を伝つ。

「あつ。」

新一の肩が震える。

それを見てクスリと笑うと、

「ええ子やから、黙っとしてな。」

耳元で囁き、その手が、背中をつたい・・・

「工藤っ、目え逸らせっ。」

「はっ？あっ！」

かちやり

「あ”—————！！！」

「どうしたん？」

笑いながら、新一の頬を撫でると、

っ

今度は太ももを悩ましげに白い手が這い・・・

かちやり

「はい。蘭ちゃん。手錠かけたから、後は好きにどうぞ。」

すごいっ。すごいよ・・・和葉ちゃん！

新一が固まってる間に、手足に手錠かけちゃった！

「蘭てめえ、どういっつもりだ！」

喚く新一の顎をまた掴むと、

「たま〜には、蘭ちゃんのお気持ち味わってな？もし、仕返しなんてしたら……」

ふっ

耳元に息を吹きかける。

「はうっ。」

「アタシが、腕によりをかけて、仕返ししたるでえ？」

「ははは服部っ！」

「……すまん。オレにはどうにもできん。」

「そういうことや。返事は？く・ど・う・く・ん？」

っっ

背中を指が滑っていく。

「うっ……は……い。」

「うふふ。おりごう。」

満足げに笑うと、今度は服部君の胸に人差し指を立てた。

「……人の計画を邪魔しようとしたおバカさんは、誰かいな？」

「いや……あの……オレ……。」

「2階行こっか？」

「えっ？あっ」

「くどー……」

「はっとりー……」

「はいはい。静かにしましょうね。」

「ひつくひつくひつく。」

「……服部、オメー、何された？」

「……フルコース。工藤お前は？」

「オレ……何時間もくすぐられた……。」

「死ぬかと思った……。」

## 仕返し指南（後書き）

蘭ちゃんの仕返しに加担する和葉ちゃん。さすがに、蘭ちゃんにエロいことはさせられなかったので、くすぐりの刑にしました。和葉ちゃんの目には、魔力があります（多分）

天誅（前書き）

和葉らぶ。 府警バージョン

## 天誅

「だいたい、高校生のガキが何で捜査に参加するんや！」

「まあまあ、そう言うなや。おかげで事件解決したんやし。」

「何がやつ！俺らがおれば解決できたわつ。あんなんなあ、本部長の子やなかつたら、ただの生意気なガキやで！親の権威笠にきて、俺らに偉そうに指示なんかしやがって。ム力つくわつ。」

「・・・確かになあ・・・頭くるとき、あるもんなあ。本部長も親ばかやな。子供のすること、何も言わんと放置してるなんて。」

「そやそや。あのガキも生意気なら、それを野放しにしている、本部長もおやつさんもおかしいねん！」

府警の喫煙所から聞こえてきた、オレの悪口。

オレが捜査に入るのをよしとしない人達がいることは知っている。

こんな悪口、いつもは気にしないんやけど、今日のは少し堪えた。

言つてた2人が、オレと仲がいいと思つてた人達やつたから。

( 高校生のくせに・・・か。 )

壁にぼんやりもたれ掛かる。

こういう時、早く大人になりたいと思う。

でも、オレは犯罪が許せない。だから、これくらいで落ち込んでい  
る暇はない。

(・・・すまん・・・おやじ)

心の中で謝っていると、届け物に来たのか、和葉の姿が見えた。その表情が・・・

(和葉?)

「こんにちは」

「あつ、ああ、和葉さん！」

慌てる刑事達。

「いつもアタシの父と幼馴染がお世話になってますう。」

「あ・・・いや・・・こちらこそ。」

「ほんまに・・・お世話になってもうて・・・」

ちろりと上目遣いで和葉が2人を見る。

「・・・あんま、いじめんといってくださいね？」

「「は・・・はい。」」

目が・・・目が怖いで、和葉っ

見ろっ！現役の刑事が固まっとなるやないか！

「おつ和葉ちゃんやないかつ。」

そこへ、和葉溺愛組のオヤジ達が喜んで寄ってきた。

「お使いか？でも、こんなところで、何しとる？」

「んふふ。この人達にな、おとーちゃんと、平次をあんまいじめんといってくださいってお願いしてたん。」

さっきの表情とは打って変わって、首をかしげて、甘えたように話す和葉。

「おやつさんと平ちゃんをお？こいつらに？何で？」

青ざめる二人の刑事。

「んふつ。内緒」

「そーかそーか内緒か。がははは。そしたら、こいつらに後でじっくり聞かんといかんなあ。」

ギロリ

和葉に対して、とろけるような笑みを浮かべていた強面集団が、一転して、凶悪犯もびっくりの顔つきになる。

あーあ、かわいそうに。

あの2人もう倒れそうやん。

半分事実やから、オレ、いいのに。

帰り一緒になった和葉に

「本当のことやから、余計なことせんでええのに。」  
って言ったら、

「アタシの大事な二人の悪口が聞こえた以上は、どうしても許せんかってん。あそこに平次がおらんかったら、もっとやっとなだけだな。」

と綺麗に笑って言われた。

もっとなって何や！？って思ったけど、少し嬉しかった。

ふいに、和葉へ愛おしさがあふれて、オレは信号待ちのとき、思わ

ず和葉にキスをする。

「……って、待て和葉！何でこの往来でもっとすごいことしよう  
とすんねん。」

「んふふふ。癒し？」

「やめいつ。」

……でも、本当に心が軽くなった。すごいなあ……和葉……  
しくしくしく

## 天誅（後書き）

ある意味、瞬殺技の和葉スマイルです。

「仕返し指南」おまけ（前書き）

「仕返し指南」の平次のその後。

## 「仕返し指南」おまけ

「なあ、フルコースって何されたんだよ？」

「・・・聞きたいか・・・工藤。」

「あ、ちよつとな・・・」

・・・以下、平次のピンク色の回想・・・

「かか、和葉ちゃん？」

「なあん？」

「ここ、工藤んちやし・・・そんなこと。」

「んふふ。平次・・・口をもつと開いて・・・」

「んっ・・・あっ・・・。あんっ・・・うんっ・・・ん。」

いきなり深いキスをされる。

オレの唇から吐息が漏れる。

「はあっ・・・和葉・・・まじで、やばいって・・・。」

ちゅっ・・・ぬちゅ・・・ちゅぱ・・・。

「も・・・やめっ。」

「なあ・・・平次・・・」

「な・・・ん？」

「アタシも気持ちよくして?」

だああああっ。何やこのかわいさっ。鼻血出るっちゅっねん！

どさっ。和葉を押し倒す。

「んっ。」

ぎしっ

「ああっ……あっ……平次……。」

ぎしっぎしっ

「やっ……こんな格好……。」

ぎしっ

「恥ずかしい……。」

あーっ、もう堪らん。

「……和葉……もう挿れてええ？」

「んっ……ダメ。」

はい？

「もつとしたいん？」

「うっん。今日はもう終・わ・り。」

「ええええええええっえっ。」

……以上、回想終わり

「……で、どうなったんだよ？」

「気づいたら、両手に手錠掛けられとって……ぐすっ……は、半裸の和葉がオレにぴとつて……朝まで生殺しで……えぐっ。」

「それがフルコース？」

「うっ……弄られて・弄って・焦らされて・お預け……。」

「や……やるなあ。和葉ちゃん。」

「元はと言えば、お前のせいやんかつ！」  
「バカ言えっ！オレだって、最後泣くまでくすぐられたんだぞっ。」

睨みあうオレら

はああああああっ

「……もうあいつら怒らせるの、やめよっ……。」

「……でも、やっぱりオレの方がひどかったよっな気がする……。」

「まだ、言うか！」

「仕返し指南」おまけ（後書き）

工藤邸にて。その後の男2人の会話。ピンク色の回想は、今夜0時  
「夜の平和な週末」で！

## 和葉の悩み（前書き）

いつでもラブラブな平次と和葉。でも、最近、平次の言動に我慢が  
なくなってきた……。悩む和葉に弄られ平次。これから、ど  
うなる！？

## 和葉の悩み

「遠山先輩・・・服部先輩の秘密かなんか握ってるんですか？」  
「何で？」

「服部先輩に聞いたんです。『遠山先輩を彼女にした理由』。そして『怖いから』って・・・。何怯えてるんですか？服部先輩。」

ぶちっ

へーえーじー（怒）

「って、後輩から言われたんやけど。アンタっ、何でそんな言い方するんっ！」

「やつ・・・怖いって、そつちの意味もあるけど・・・」  
「あるけど、何なん！」

「お前が離れていくのが怖いねん！」

「ほいじゃ、そう言えばええやろっ」

「言えるかっ！」

はああああ。

「・・・もう、ええ。」

「はっ？」

「もう、ええ。アンタのその妙なプライドに振り回されるのに、ほんまに疲れた。」

くいつ 平次のきれいな顎を掴む。

「なななな、何？和葉ちゃん？」

何かを少し期待するこの顔も、今日はム力つく……。

「アンタなんか……アンタなんか、もう知らん！どこにでも、行ってまえっ。」

「えっ！？ちよっ。」  
「かちやっ」

「あっ、こらっ。手錠かけるな。おいっ。」  
「ふんっ。」

アタシは平次を放置して、その場を後にした。

……アタシは平次が好き。平次もアタシのことが好き。

けど最近、男らしい平次をあんまり見ていない。

「……アタシが悪いんやけど……弄り倒してるからな……。」

でも、やっぱりアタシは、アタシの好きにさせてくれる優しい平次が大好き。

本当はアタシより力があるのに、アタシの思うが侘になっただけのことか。

怖い怖い言いながら、アタシにだけ優しいことか。

何でもきちんと言葉にしてくれるところとか。

それから……誰の目に見ても明らかかなほど、アタシを特別扱いしてくれることか。

でも・・・でもな？平次。

たまには、男らしく、ぐいっと引っ張って欲しい時もあんな・・・。

「・・・ふっ。アタシが変わらんと、そりゃ無理やな・・・。」

アタシは自嘲的な笑いをこぼした。

和葉の悩み（後書き）

平次の何かを少し期待する顔・・・絶対、かわいいっ

アンタ、誰？（前書き）

平次登場。

「アンタ、誰？」

「アンタなんか、どっか行ってまえっ。」

和葉の迫力ある怒った顔が忘れられない。

（・・・行ってまえて言われてもなあ・・・）

オレにはお前の傍しか、居場所ないって言うとするやないかつ。

「あんなに怒らんでも・・・和葉のポケット。」

ポスン ベッドに仰向けになる。。

枕元に置いてある携帯は、うんともすんとも言わない。

「掛けてみるかなあ・・・」  
携帯を手取る。

「えっと、和葉の番号は・・・。」

キーンキーンキーン

「・・・何や、耳鳴りがひどいなあ・・・」

キキキキキキキ キーンキーンキーン

「ああっ、もうっうるさいっ。明日でええっ。もう、寝るっ!」

明日朝一で、和葉に謝ることにして、オレは布団を被って眠りについた。

その夜、夢に出てきた和葉は、妖しげに笑っていた・・・。

・・・ちゅんちゅんちゅんちゅん・・・

「おはよ。」

朝、和葉が迎えに来た。

「おう・・・はよ。」

「眠そうやね。」

「ん。夢見悪くて・・・。」

「・・・ふーん？また、悪夢見ないようにしてやるっか？」

っーっ

悩ましげな手つきで、和葉がオレを触る。

「ななななな、何すんねん！」

きよとんとする和葉。慌てるオレ。

「何でつて・・・いつものことやん。」

「うそつけっ。こないな、やらしいこと、されたことないわっ！」

「や・・・やらしい？」

和葉が啞然とした顔をしてオレを見る。

オレは、赤い顔を見られたくなくて、先を歩く。

(・・・何なんや・・・アイツ・・・)

あっそや、謝らんといかんやつた。

「和葉・・・すまん。」

振り向きながら、昨日のことを謝る。

「何が？」

「昨日……。」

言いかけたとたん、くいつと顎を掴まれた。

「アンタ……だれ？」

「はっ？」

「アンタ、アタシの平次やないっ！誰なん！黒羽君！？」

「はあっ！？って、何でお前黒羽の秘密を知つとんねん！」

「何っでて……。」

……思わず睨みあう、オレと和葉。

「……和葉……お前大丈夫か？」

「……平次……アンタこそ大丈夫なん？」

お互いの顔をじつと見る。

……和葉やんな……でも、何かすごい……色気が……

ぐっ。腕をいきなり掴まれた。

むにゅ。胸の感触が腕に伝わる。

ぼっ顔が真っ赤になった。

「ちよっ、なん、やめいっ！」

って、和葉はこんなことせんよな……。

「・・・やっぱり、アンタは平次ちゃう・・・。」  
目の前の和葉が訝しげに眉を顰めた・・・。

アンタ、誰？（後書き）

こっちの和葉ちゃんのやり方は、すごい強引（笑）

オレの和葉？

「アンタ、アタシの平次ちゃう。」

訝しげにオレを見る、目の前の和葉。

ごくっ

オレは喉をならす。

これは・・・和葉やけど、和葉やない・・・目が・・・目が離せん。

「・・・お前こそ、オレの和葉やないやろ？」

「やから、さつきからそう言いよるやないの。」

・・・なぜ、そんな異常に落ち着いてる？

「じゃあ、お前は誰や。」

「遠山和葉。服部平次の唯一最愛の彼女。」

ぶはっ

オレは嘔き出す。

「ななな、お前何言ってる。自分で言ってる、恥ずかしくないんか！」

「ない。」

しれっという和葉。

「何でっ！」

「ほんとのことやから。」

「はっ。さよか。」

「……はつきりわかった。こいつはオレの知ってる和葉ではない……でも、和葉ではあって、もちろん演技なんかじゃなくて……」

オレは顎に手を当てて、考える。

「……あんな、和葉。」

「ん？」

「驚くなよ。」

「うん。」

「オレかお前かどっちかがな……パラレルワールドに紛れ込んだみたいやな。」

「あー。そついうことなんやな。」

和葉は全く驚かなかった。

（……少しは驚けや……）

オレはどっと疲れが出た。

オレの和葉？（後書き）

同じシュチエーションなのに・・・小悪魔強し！

パレルワールド(前書き)

どっちが紛れ込んだ!?

## パラレルワールド

「パラレルワールドってほんまなん？」

「・・・多分な。」

オレ達は今、学校の屋上で授業をサボっている。

やって、どっちが紛れ込んだんだか、わからんのやで？

こんな和葉に振り回されたまま、授業なんか受けれるかつちゅうねん！

「パラレルワールドってあれやんな？世界が本のページみたいになつてて・・・例えば、1ページの世界のアタシの靴下が白、2ページのアタシのはピンク・・・そして、3ページ目はストッキングっていう風にちよこつとずつ変わってて、最後のページには全然違う世界になってるってやつやろ？」

「そうそう。お前よう知つとんな？」

「ア・タ・シの平次が教えてくれました！」

嬉しそうに言うと、嫣然と笑って、こつちを見た。

(・・・なななな、何や。この色気・・・だあつたまらんっ)

オレは内心慌てると、ごろんつとその場に寝転んだ。

「・・・その話・・・オレも、オレの和葉に説明したことあんで？ただ、オレの場合は、リボンの色やったけどな。」

「へえ。そうなんや。」

「ん。やっぱ違う世界なんやなあ。」

オレは寝たまま続ける。

「問題は・・・お前とオレとどっちが紛れ込んだかやなあ。」

「そーやなあ。」

そう言うと、いきなり和葉がオレの上に跨った。

「ななななな、何すんねんっ。どけっ和葉っ」

「・・・ええから、黙って。」

耳元で囁かれ、体が瞬時に固まる。

(うひゃー。胸が・・・胸が見えるっ)

ガチャ

屋上のドアが開いた。

「あつ。すすすみません。お、お楽しみ中。」

「うふふふ。ええんよ・・・なあ、はよドア閉めてもらえる?」

「はははは、はいっ。」

ガチャ

またドアを閉めて出て行った。

ひょい。和葉がオレからいきなりどける。

「なっ」(・・・残念って、アホかオレ!?)

「アンタみたいやな。紛れ込んだん。」

「へっ?」

「いや、朝から思うとったんや。アンタ、アンタのアタシにあんま触れたことないやろ?」

「……悪いか。」

「んふふふ。いや、悪くはないんやけどな……。もし、アンタの世界で今みたいなこと、アタシらがやってたら、どうなる?」

「あっ!?!」

「やろ?アタシら結構こんな日常茶飯事やねん。」

うふふふ。

こっちの和葉は妖しく美しい笑みを浮かべていた。

## パラレルワールド（後書き）

小悪魔流判定の仕方。でも、上に乗ってて、日常茶飯事って・・・

あなたのアタシ、お前のオレ（前書き）

学園生活。振り回されっぱなし。

## アンタのアタシ、お前のオレ

「平次い。」

和葉がオレのクラスにやつてくる。

パラレルワールドとはいえ、オレの世界と、こっちの世界は近かつたらしく、学園生活には、支障はない。

ただちっこい差がどうしてもあるので、和葉はオレと極力一緒にいてくれる。

2人で歩くと気づく、みんなの羨望のまなざし。

「なあ……」

「何？」

「こっちのオレとお前は公認やったんか？」

「うん。」

「へえー」

「うらやましい？」

和葉が笑って、オレの顔を覗き込む

（わあっ。顔っ、顔が近いっちゅうねん！）

「べつに……」

オレは平静な振りをして、そっぽを向く。

ふふふふ。

和葉が笑って、腕に触れてきた。

「なっ・・・やめいつ。」

「こんくらいのスキンシップは日常茶飯事やて。」

2人中庭に腰掛ける。

はあああつ。この和葉、ほんま心臓に悪い・・・。

オレは深呼吸して、平静を取り戻す。

「今日は困ったことなかったん？」

和葉がオレに話しかける。

「ある。この最終の進路希望調査票、何て書けばええん。」

「ああ。京大法学部。」

「へっ？東京行かんのか？」

「って、アンタの世界では違うん？」

「オレ？オレは東都大。」

「ふーん。アタシの平次は、『オレがこっちおらんと、西の名探偵がおらんくなるやろ？』やって。」

「・・・で、お前は？」

「アタシ、阪大。やりたいことがあるんよ。」

「はっ？別々の大学に通うんか？」

「うん。2人で散々話し合った結果やねん。」

「へええ。」

「アンタの和葉チャンは？」

「・・・その言い方やめい・・・同じ大学や。」

「ふーん。オレについてこいつてか。」

くすくすくす。

可笑しそうに和葉が笑う。

「・・・悪いか？」

「ううん。別に。アタシは好きにさせてもらっとるからな・・・あの意味、その束縛羨ましいわ。」  
和葉が本当に羨ましそうに言う。

「ほー。」

(えらく理解があるやんけ。こっちのオレは。)

「でも、ま、一緒の大学に行こうって言われても・・・。」  
「ん？」

「多分、行かんやつたけどな。」

和葉がにっこり笑う。

・・・あ・・・この笑顔・・・オレの和葉と一緒にや。  
ちよつと嬉しくなって、意地悪を言ってみた。

「・・・東京でもか？」

「そやなー。東京行くとか言い出したら・・・。」

んふんふん。

「アタシから離れられないように、調教しなおすかな。」

恐ろしい言葉を発しながら、艶やかに和葉は笑った。

(ちよ・・・調教!?何やってんのや、こいつら・・・)

さわっ 心地よい風が、2人の間を通り抜けた。  
和葉のすべてが、風になびく。

やらしいのに、やらしいことばっかすんのに……何でそんなきれいなんや。

思わず和葉に見蕩れてしまう。

「なあ、平次。」

「な、何や？」

「アンタ、ちゃんと言葉にしとる？」

「何を？」

「好きとか、愛してるとか、そういうの。」

油断していたオレは、ぶはっ 盛大に噴き出した。

「は、恥ずかしくて、言えるか！？そんなこと！」

「ふーん。」

和葉がオレの顔を覗き込む。

揺れる瞳に捕らわれる。

同じ顔なのに……和葉なのに……

つーっ その白い手が、オレの頬を伝った。

……この手が欲しい……もっと欲しい……

手を伸ばしかけて、はっと気がつく。

（・・・オレは今何を・・・）

動揺するオレをよそに、和葉がオレの髪をかき上げる。

「・・・アタシは言うて欲しいけどな・・・。」

オレはその赤い唇から目が離せなかった。

アンタのアタシ、お前のオレ（後書き）

平次、陥落寸前。

## 変化

こっちへきて、一週間。

「平次」

休み時間になると、必ずひよこつと顔を出す、こっちの和葉。そして、なんやかんやとちよっかいを出される。

最初は振り回されっぱなしだったけど……。

……それをいつからか、心待ちにしているオレがいる。

「おはよ、平次。」

いつもの朝。

つて、ん？

「……何か……感じが……。」

目の前の和葉を見て驚く。

何か、感じが違う……かといって、オレの和葉とはまた違って……

「ああ！」

思い出したように和葉がぼんつと手を叩いた。

「言っの忘れとった！本来のアタシはこっちやねん。」

「はっ？」

「何かの拍子にな、こうスイッチが入ると、ああいう……やらし  
ー？アタシになるらしいねん。」

やらしーのところ、ぼつと頬を染める和葉。

(・・・かわええ・・・)

じゃなくて！

「じゃ、この一週間は・・・。」

「そう。違う方のアタシやねん。アタシの平次とケンカしてな、弄り倒そうって思ったのと、急激な変化で、中々こっちに戻れん・・・。」

「は・・・さよか。」

2人並んで歩き始める。

(ちゆうことは・・・あの和葉にもう会えないって可能性もあるわけやな・・・。)

オレはちよつと複雑な心境になる。

ふと横を見ると、心配そうにこっちを見る和葉がいた。

(オレが変に思ったんじゃないかと、心配になったか・・・)

ぼんっ 安心させるように頭を軽く叩く。

「・・・オレは何も思うとらん。・・・そりゃ、びっくりはしたけど・・・どつちもお前やから、ええ。」

すると、和葉がぱあっと花が綻ぶように笑った。

オレは、その笑顔からも目が離せなかった・・・。

## 変化（後書き）

普通の和葉に戻りました。平次骨抜き。

## 嫉妬に似た痛み

日曜日。

「なあ、どっか出掛けん？」

和葉が誘いに来た。

「どっかって、どこや？人ごみはイヤやで。」

「うー……」

口を尖らせる和葉。

(やから、それ、かわええって……)

あっさり負けて、妥協案を出す。

「……少しなら……」

「ほんまあ!!」

満面の笑みを浮かべる和葉。

……ほんま、コロコロ表情が変わるヤツやて。

オレは、こっそり笑いながら、支度をした。

……こっちの和葉にも振り回されとるな。でも、それも、イヤやない……。

和葉が行きたいと言ってた所は、案の定人が多かった。

「なあ、腕組んでええ？」

「・・・いや。恥ずかしい。」

「ちえー。」

和葉が拗ねる。

・・・やから、その顔やめいって。

「拗ねても、ダメや。はぐれるなや。」

「はい。」

それにしても・・・人が多すぎるっ。

(・・・うー)

オレはついてきたことを、少し後悔した。

ふと気がつくくと、隣にいたはずの和葉がない。

「和葉っ!?!」

慌てて振り向くと、ナンパに捕まっていた。

「和葉!」

オレが駆け寄るより先に、男達を倒す和葉。

「・・・ちよっ、お前」

「あ、平次。」

慌てて、その場から連れ出す。

「おまつ・・・一般人に技かけるのやめい。しかも男相手に・・・  
仕返しされたら、どうすんのや!」

きよとんとする和葉。

「やって・・・平次がおるやろう？」

・・・何かあればオレが助けると信じている純粋な瞳。絶対的な信頼感。

チクッ

胸が痛む。

・・・お前のオレは、どんな時でも、お前を離さんで守ってるんやろうな。

それは嫉妬に似た痛み。

複雑な表情を見せるオレに、和葉ははつとした顔をした。

「あっ・・・ごめ・・・アタシ・・・そやな・・・平次ちゃうもんな。」

悲しそうに目を伏せる。

「アタシの平次は・・・」  
そう言つと、ぼろぼろ泣き出した。

・・・子供のような泣き顔。

ぐいっ

乱暴に涙を拭つと、オレは、和葉の手を繋いで、歩き出した。

「へっ？平次、手・・・。」

「・・・手繋ぐくらいなら、ええ・・・。」

「・・・ありがとう。」

和葉は、嬉しそうに笑った。

その笑顔を見れるのが嬉しいと思う自分に、オレは戸惑いを覚えた。

嫉妬に似た痛み（後書き）

普通の和葉ちゃんにもやられまくってます。

## 惚れる

妖しげに笑う和葉。

はにかんだ様に笑う和葉。

ころころ表情も人格も変わる和葉。

・・・オレのじゃない和葉。

オレは多分、この和葉に惚れている・・・。

「平次。」

いつものように和葉が迎えに来て、二人で屋上へ上がる。日曜日出掛けて以来、オレ達の距離はぐっと縮んだ。

・・・それは、オレの和葉との距離より近いくらいに。

(・・・まずいな。)

内心思う。けど、オレは、この和葉に魅かれてやまない。

「なあ。」

和葉の膝枕に寝転びながら、和葉に問いかける。

「なん？」

「お前・・・呼び出されたりせんのか？」

「誰に？」

「・・・勘違い女とか・・・」

「ああ。」

和葉はにっこり微笑む。

「そういつん、平次が全部排除してくれたし、それでもアタシを呼び出すアホは、やってええって言われとるから。」

そんな命知らず、おらんよ。

楽しそうに和葉は微笑む。

「ふーん。」

面白くない。

「平次？」

いきなり起き上がった俺の顔を和葉が覗き込む。

・・・普通の和葉なのに、妖しく揺れる瞳。

思わずぐいっと引き寄せる。

「どしたん？」

「・・・おもろない。」

「はっ？」

「おもろないんや。」

(お前を完璧に守るこっちのオレが!)

・・・カチツ

カチツ？何や？今の音・・・

和葉を見ると、そこには・・・

「か、和葉？」

「……妬いたん？」

妖しくオレを覗き込むもう一人の和葉。

「はっ？」

「アタシの平次に妬いたんやろ？」

「やっ……違っ。」

「違っん？」

悲しそうに目を伏せる。

「……アタシ、寂しいねん。」

「はっ？」

「やっ……。」

オレの頬に白い手を伸ばす。

「やっ……この平次、好きとか何も口に出してくれんのやもん。抱き合うこともできんし。同じ顔なのに。平次……会いたい。」

はらはらはら

キレイな涙が頬を伝う。

この間の子供のような泣き顔とはまた違って、美しい絵のような泣き顔……。

「……和葉……。」

思わずその頬に手を伸ばす。

「……平次。」

オレの手に自分の手を添える和葉。

「慰めて……。」

オレはこの和葉に堕ちていった……。

惚れる(後書き)

堕ちたな。完璧。

## 痴戯（前書き）

この章は、「小悪魔和葉」にだけあります。

## 痴戯

「はあっんっ。」

喘ぐ和葉。

抱き合つて座っている和葉のしなやかな上体が反り返る。オレは和葉を逃がすまいと、その白い首筋に唇を寄せる。

・・・終わりのない痴戯・・・

オレはこの白い体に溺れている。

オレの激しい愛撫のせいで、和葉の制服が乱れてきた。

・・・制服の間から見え隠れする、和葉の素肌。

白い肌が桃色に染まっている。

それに加えて、上気した顔がやらしすぎて、我慢できず、セーラーの下から入っていた手を、スカートの方に伸ばした。

するとその手を和葉がそつと止める。

「・・・やつ。」

「・・・ダメか？」

「んっ。」

和葉がオレの首に手を回し、激しくキスをする。

オレはそれに応えながら、また和葉の体をまさぐる。

「和葉っ・・・和葉、和葉っ。」

「ふっあっ・・・へえじ・・・。」

・・・これだけお互い求め合ってるのに、和葉は最後の一线だけは許してくれない。

一度何で？と聞いたら

「あっちのアタシとアタシの平次に悪いから。」  
と笑って答えた。

(・・・ここまでやって、今さら・・・)

そう思うけど、それは和葉のポリシーらしい。

制服の前から見え隠れする胸を、舌で愛撫する。

「んっっ・・・あっ・・・あ、あっっ・・・ふア・・・やあ、ん・・・」

和葉がまた仰け反る。

オレは体が離れるのがいやで、また強く抱きしめながら、愛撫を続ける。

「んっ・・・あっ・・・」

和葉がくたつとなった。

オレは汗ばんだ額にそっとキスを落とす。

しばらく抱き合っていると、ぱんっと押し倒されて、和葉がオレの上に乗ってきた。

「今度はアタシの番」

・・・げ、元気やな。お前。

絶句したオレに対し、

「いや？」

和葉の瞳が妖しく揺れる。

オレはこの目に逆らえない。

・・・辛い快樂の時間が始まる。

「くっ。」

「・・・こっ、いやなん？」

「・・・あっ・・・うっ。」

「いいん？」

「・・・くっ。」

「声出しているのに・・・。」

出せ〜るか————！！

「強情やね。コレは？」

「ひゃあっ・・・やめっ・・・なっ・・・うっ。」

「んふふふ。まだまだやで。へ・え・じ 舌出して？」

「んっくっっ。ふあっ。」

「ふふふふふふ。」

「あっあっああっあ————！！。」

・・・またやられた。

ばふん。

枕に顔を埋める。

それを見て、ふふふふふ。和葉が楽しそうに笑う。

「降参？」

「・・・降参。」

ふわっ

和葉がオレの横に寝転んだ。

痴戯（後書き）

「小悪魔和葉ちゃん」のみにあるお話。いや、この題で、あっち  
平和な週末）は書けなくて・・・ははははは。

心の在り処（前書き）

「痴戯」の続き

## 心の在り処

オレの横に寝転んで、擦り寄ってくる、かわいい和葉。

オレは、そのキレイな髪を手ですいて遊ぶ。

「なあ？」

「なん？」

「オレらの関係って何やるな？」

ふと思ったことを口に出す。

「んー・・・浮気？ちよつとちやうなあ・・・擬似恋愛？」

「擬似？」

「そ。お互いの相手やと思って恋愛しとんのよ。アタシら。」

「・・・オレはちやう・・・」

無然として答える。

でも、ふと脳裏に浮かんだのは、儂げに微笑むオレの和葉。

それを見て、和葉がくすつと笑う。

「違わんよ・・・平次。アンタはアタシの中に、アンタの和葉を探しとるし、いつもアタシとこんなことする時、罪悪感を感じとる・・・それは・・・アタシも同じ。」

「・・・。」

「・・・アタシがアンタに魅かれてるのも、ほんまやけど・・・そのうち、アンタは自分の世界に帰るやろ？ま、それまで、割り切っ

て、楽しむ。」

さらっ

起き上がって和葉が上着を纏う。

オレはその華奢な背中を抱きしめた。

「・・・ほんまか？」

「・・・うん。」

「うそつけ・・・割り切る言うなら、そないな顔すんなや・・・。」

「・・・うっ。」

「泣くな・・・和葉。」

和葉を振り向かせ、キスをする。

そのキスがだんだん深くなり、オレは和葉を押し倒す。

「あっ・・・」

和葉の泣き顔が見えた。

オレはその顔を見たくなくて、和葉の胸にむしゃぶりつく。

・・・先のことなど、考えたくない。この時だけは、誰にも邪魔されたくない。ただ2人溺れていく・・・。

どっちが先に倒れこんだのか・・・

それがやっと終わった時、

オレに縋るように手を伸ばしながら、

「・・・心が・・・心が二つに割れそうや・・・」

和葉は静かに泣いた。

・・・オレの心はすでに二つに割れていた。

## 心の在り処（後書き）

「痴戯」直後の2人。本当は一章にまとめてたんですが、最初と最後があまりにも違いすぎたので、分けました。こっちの2人は、何か楽しんでますが、それはそれで、辛いんですわ・・・。

## 残された時間

あっちの平次がやってきて、もうすぐ一ヶ月。

最初は戸惑っていたけど、アタシは確実に、この平次にも魅かれて  
いる。

アタシに触れたくて堪らないのに、そっぽを向いている平次。

アタシのわがままに、文句言いながらも付き合ってくれる平次。

・・・そして、アタシに触れた時の、普段からは想像もつかないく  
らい情熱的な平次。

アタシはこの不器用な平次が、愛おしくて堪らない。

けど、最近アタシは気づいてしまった。

・・・戯れた後、アタシが眠りにつくと、必ず起き上がってぼんや  
りしていることを。

今日もアタシに背を向けて、何かを考え込んでいる。

(・・・平次・・・)

すっ 手を伸ばして、その背中に触れる。

「ごめん。起こしたか？」

「ううん・・・。」

平次が揺れる瞳でアタシを見る。

平次は迷っている。

これからどうするか。

でも、何も言わない。

・・・アタシにはわかる。アタシ達の別れは、多分近い・・・。

ある日、いつものように平次の部屋で戯れていると、いきなり平次がアタシの胸に突っ伏した。

「平次？」

ここからは、平次の顔が見えないけど、肩が小さく震えている。

「へ・・・い・・・。」

「・・・あかん・・・。」

「うん？」

「もう・・・あかん。これ以上触れたら、お前から離れきれん。」

・・・とうとうこの日が来た。

アタシも覚悟を決める。

「そう・・・。」

「・・・でも、お前に触れたい・・・。」

「・・・うん。」

「どろろして・・・どろろして、こんなに深みに嵌ってしまったんやろ  
う・・・。」

「・・・なんでやろうなあ。」

「オレ・・・お前と離れるのがイヤや。」

「・・・アタシも。」

そつと平次の背中に手を回す。

「正直、お前を抱いてしまって、ずっとこっちにいてもええな。っ  
て思ったこともあつたけどな。」

「ん。」

「やっぱ、オレはあつちの世界の人間やねん。」

「うん。」

「お前とおるのが楽しすぎて、帰り方なんか考えたこともなかった  
けど・・・。」

「う・・・ん。」

「もう戻らんと、決心がつかんで、本当に戻れなくなってまう。」

「・・・。」

「でも、お前とは離れたくない。」

「・・・ん。」

「お前もそつ思つてくれるか？」

弱弱しく平次が聞く。

「当たり前やないの・・・もう、会えんの・・・？」

「多分な・・・。最後やから言うけど、オレは、本気でお前に惚れ  
とつた。」

「平次・・・。」

アタシは平次を抱きしめる。

「アタシも・・・アタシも平次が好き・・・。」

がばっ。

平次がアタシに覆いかぶさった。

「和葉・・・和葉っ。」

アタシの名前を呼びながら、激しくアタシを愛撫する。

「やつ・・・あっ・・・平次っ・・・。」

「忘れるんかつ?」

「な・・・?」

「忘れるんかつ?オレのこと。」

「そんなん・・・イヤや・・・。」

「忘れんなやつ。」

平次が動く。

平次がアタシの感じるすべてを、責め続ける。

「やつ・・・平次っ。平次っ・・・あっ・・・あああああっ。」

アタシは意識を失った。

・・・ちゅっ　ちゅっ　ちゅっ

瞼に、頬に、額に優しくキスされる感触で目が覚める。

「・・・平次?」

「・・・起きたか?」

「ん。」

「ひどうして、すまん。」

「・・・ううん。」

「・・・ほんまは抱こうと思ったんやけど・・・。」  
「うん。」

「決心鈍るから、やめた。」  
「そう・・・。」

アタシは平次の頬に手を伸ばす。

「・・・鈍っても、よかつたんに・・・。」

驚いた平次がアタシの顔を見て、真っ赤な顔をして、目を逸らした。

「・・・そんな目で・・・そんなこと、言うなや・・・。必死で我慢したんに・・・。」

その姿がかわいくて、平次を押し倒す。

「・・・和葉？」

怯える平次。

「・・・ふふふ。ほいじゃ、アタシを置いていく平次君への送別特別でんこ盛りサービスということぞ。」

「へっ？」

「もう悩めんぐらい、気持ちよくして、あ・げ・る。」

「やめっ・・・あっ・・・やー！ーめー！ーてー！ー！ー！」

うふふふ。

アタシは楽しげに笑う。

そうや・・・アンタはこっちの人間じゃない。

こんな日に来ることは、わかっとったわ。

でもな？しんみりするのには、アタシの性分に合わんねん。

やから・・・アンタがアタシを忘れきれんぐらい、アタシの跡を残しちやるで。へ・え・じ

「やあつああああ。」

・・・アタシ達に残された時間は少ない。

残された時間（後書き）

和葉ちゃん、本領発揮。

## 別れ

いつも以上にむちゃくちゃにやられた翌日。

お互い体で（？）想いを伝え合ったオレ達は、妙にすっきりして、顔を合わせている。

2人話しているのは、オレの世界への戻り方。

「何か変わったことなかったん？」

「あの日・・・オレは和葉とケンカして・・・。」

「アタシらと全く一緒やな。で？」

「で、和葉に夜電話しようとしたら、耳鳴りがして・・・。」

「電話？かかってこんやったで？」

「いや、かけきれんやったんや。そうやっ、電話やっ。携帯もったら、すんごい耳鳴りがしてな。頭が痛うて、痛うて・・・。」

・・・思い出した・・・。

「ほいじゃ、とりあえず、アタシにかけてみる？」

「そやな。」

「えっと和葉の番号は・・・。あれ？」

「どうしたん？」

「・・・下一桁が違う・・・和葉のは「8」「やのに、「こっちは」「6」になっとなる。」

これが、オレらの世界の差か・・・

「・・・あつちの和葉に掛けてみたら？」

和葉がちよつと意地悪そうに言う。

「そ・・・やな・・・。」

それでも、オレの指は動かない。

そつ 和葉がオレの手に、自分の手を添えた。

オレ達はじつと見つめあう。

和葉が顔を近づけてきた。

妖しい瞳がオレを捉える。

この瞳に散々翻弄されてきた・・・

「・・・平次・・・舌出して・・・。」

素直に舌を出すと、それに、和葉がやらしく舌を絡めてきた。

「んっあっ・・・うっ・・・。」

深いキスに応えながら考える。

・・・これをかけたら、多分、オレはオレの世界に戻る。そしたら・・・

上の空のオレに気がついたのか、和葉がますます激しく舌を絡めてくる。

「・・・くっ・・・んっ」

あかーん。気持ちよすぎて考えれん！  
もういつそのまま・・・  
いやいや、それは、お互い昨日納得したやないか！

あーでも、気持ちええ・・・

恍惚としてきたら、いきなり和葉が唇を離した。

「・・・気持ちええ？平次？」  
顎を掴まれる。

「ん。」  
「・・・ほんなら・・・」

カリッ

「あつ。」  
耳たぶを甘噛みされる。

そして、甘い声で囁やかれた。

「とつとつ、そのボタン押して、アンタの和葉ちゃんと続きやいい。」  
「はっ？」

思わず和葉を見ると、嫣然と笑っていた。

「アタシはアタシの平次と続きやるから・・・」

和葉の頬に、涙が一筋伝う。

「・・・はよ・・・帰り」

ピッ 和葉がボタンを押す。

「あっ……」

キーンキーンキーン

「あっつ。耳鳴りがしてきた。」

キンキンキンキーン

「いったー……和葉……オレのこと忘れんなやつ」

「アンタもな……って、えっ？大丈夫平次！」

「……はははは。小悪魔なのに……優しいな……お前……」

ああ。目が霞んできた。

「平次？平次っ？」

「かずは……キスして……」

「んっ。」

「お前にほんとに魅かれとった……す……」

「平次っ……それ、アタシに言うたらあかん！アンタの和葉に最初に言わな！言葉にせんとだめやで！」

「……かずは……ほんと、お前は……」

（……ええ女やな……）

……小悪魔に翻弄され続けたオレの恋は終わった……

## 別れ（後書き）

恋の終わり。こっちのカップリングも相当好きだったんですけどね。  
この平次と和葉の戯れは、夜の方へ……。

お帰り(前書き)

和葉サイド

## お帰り

平次があっちのアタシに電話をかけた翌日。

耳鳴りがして、頭が痛いと言った平次は、いきなり寝てしまった。アタシは、いくらなんでも平日に泊まる訳には行かず、あの後帰ったので、平次がどうなったかわからない。

(・・・どつちの平次やるか?)

不安になりながら、平次の家へ迎えに行く。

「平次い。」

「おっ、和葉。おはよーさん。」

あっ・・・アタシの平次や。

っん。鼻の奥が痛くなる。

久々アタシの平次に会えた嬉しさと、あっちの平次ともう会えない寂しさと。

「どうしたん？和葉。」

「ん？何でもない。」

「ほっかー。ほないこか。」

平次がアタシの肩を抱き寄せる。

・・・ちよい待ちい。一ヶ月ぶりなのに、アンタなんでそんな自然

やねん！

平次の横顔を盗み見ても、何の戸惑いも見えない。

(演技してる風には見えんけどなあ……)

とりあえず、かまかけてみることにした。

「……平次。」

「ん？」

「久しぶりやね。」

「何が？」

……やっぱおかしい。

「平次。」

「何やって。」

「今日何日？」

「×月 日」

……合つとる。

じゃあ、何で？

(……ひよつとして、何も覚えてないとか……？じゃあ、何で日付があつとるん？)

悶々と考えていると、平次が不思議そうに顔を覗き込んできた。

「どした？えらく大人しいな。」

「そう?」

「ん。何や夢の中に出てた和葉みたいや。」

平次が嬉しそうに笑う。

「夢の中?」

「ああ、えらく長い夢見てな。その中のお前が、本当つぶでなあ。

キスがまた下手なんや。かわいいの何のって。オレ、久々萌えたわ

ー。あつ、でも、夢やで?」

夢に妬くなよ〜かかかか。

平次が何が楽しいのか大笑いしている。

(・・・こんのあほっ!そら、夢やのうて、あっちのアタシやつ!)

アタシはコブシを握り締める。

そりゃ、アタシもあっちの平次の不器用な愛にくらっときたけど・・・

・・・でもでも・・・アンタは許せん!理不尽?そんなの知らん!

・・・だって、アタシ、女やもん!

ぼんっ 怒りが爆発する。

「・・・アンタって男は、ほんまにもう・・・純情な女にコロコロ

コロコロ・・・。」

「・・・いや、あの・・・夢やって。」

「どうやってたら、アタシだけに満足するん!?」

「やつ・・・だから、夢やって!な、泣くなや!和葉。」

慌てふためく平次。でも許さん。絶対許さん!

「・・・スペシャルやで。平次。」

「へっ？」

「フルコースの上、スペシャルや。アタシの愛情、全部受け取ってもらおう。」

「や・・・だから、それ夢で・・・しかも、相手お前やって・・・」

「アタシちゃうもん！行くでっ。」

「や、やめっ。和葉っ、おいっ。」

「アンタの頭にある、あっちのアタシ、消してやるっ。」

・・・

「ひっくひっくひっく・・・夢やって言うてるのに・・・和葉・・・もうやめてなあ。」

「イ・ヤ！アタシも中途半端で欲求不満なんやっ！」

「こ、壊れるー！ー！ー！」

「人間、こんくらいで、壊れません！ほらっ。」

「やっ・・・あっ・・・あああああ。」

・・・あっ・・・気失っでもうた・・・

「ごめん。」

平次に布団をかける。

寝顔を見ると、愛おしさが込み上げて来る。

「・・・お帰り・・・平次。アタシとこ、帰ってきてくれて、ありがとう。」

## お帰り（後書き）

こっちは和葉サイドで。こっちの平次は記憶がすっぽり抜けています。でも・・・ふふふふ。次のお楽しみで。

## エンドレス(前書き)

こっちの2人のその後。

## エンドレス

(・・・和葉・・・オレのこと・・・忘れたいか?)

(いややつ・・・アンタのことも・・・好きやったんやもん!)

(好きやったで、和葉・・・。)

(平次つ・・・平次・・・平次~~~~~)

「和葉っ」

がばっ 大声で叫んで、起き上がる。

隣にはあられもない姿で眠る、オレの和葉。

・・・思い出してもうた・・・。全部。

あっちの和葉のことも、オレがあこの和葉にも、惚れてたことも・・・

「んっ。」

和葉がかすかに身じろいで、オレに擦り寄ってくる。

途端押し寄せってくる、後悔。

「・・・ごめんな。」

和葉の髪を撫でる。

安心したようにオレに引っ付いて寝る和葉。

それを見て、オレはくすつと笑う。

「・・・やっぱお前が一番や。ただいま。和葉。」

髪を一筋掬って、キスを落とす。

「……ん？ちよお待てよ……そういえば、こいつ……」

（「アンタの頭にある、あっちのアタシ、消してやるっ。」）

そんなこと言ってたな。ちゆうことは、こいつは記憶があった訳か……。

アツチとかコツチとか言うつちゆうことは……やっぱあっちのオレがおったわけで……

「……ほー……で？中途半端で欲求不満ちゆうのは、どういうことなんかな？和葉ちゃん？」

「和葉……和葉。」

眠る和葉を揺り起こす。

「な……ん？」

「あっちのオレどうやった？」

「ん……。不器用やったけど……情熱的で……何や新鮮やったで……反応が初々しくて……って、えっ？」

がばっ 跳ね起きる和葉。

「へへへへ、平次？」

オレの顔を見て、後ずさる。

「へえー。和葉ちゃんもお楽しみやった訳や。」

「えっ、いや、だって、アンタも……。」

「オレはキスしかしとらんわつ。それなんに……」

ずいつ 和葉ににじり寄る。

「へっキスだけ？」

驚く和葉。

「よくもまあ、こんな仕置きかましくさって……」

ずいつずいつ 和葉を壁まで追い詰める。

「ちよつ、待つて。平次。」

くいつ 慌てる和葉のその細い顎を掴む。

「……オレとは言え、違つ男にその体触らせよつて……覚悟  
せいや。和葉。」

「ひっ。」

「お前の頭にあるあつちのオレも、キレイに消してやるわ。」

「いや……やから……。」

「……そや、選べ。」

「な、何を？」

「じつくりねつちり一晩中と、がつつり激しく一晩中と。」

青ざめる和葉。

「いや……あの……やから、アタシら最後までは……」

ぷつつ 最後の寸前まではいったんかい！

「……そーかそーか。ハーフがええか。」



## エンドレス（後書き）

体力使い果たしそうだな・・・この2人。  
パラレルこれで終了です。「小悪魔」はまた単発ものに変わります。

## 事件解決法

わからん……

トリックも犯人も全くわからん。

オレは煮詰まった。

こうしとる内にも、犯人が！と思うあまり、ますます無限のループに陥る。

そんなオレの後ろから聞こえてきた、甘い声。

「わからんのん？」

「……わからん。」

「さっぱり？」

「さっぱり。」

オレは、後ろを振り向いた。

そして、すぐ、前に向き直る。

……何でこんな事件現場で小悪魔モードなんですか？アナタ……。

見なかったことにして、推理を続ける。

「ねえ。」

無視していると、後ろから耳を甘噛みされた。

「あっつ。」

「トイレ行く？」

「一人で行って来いやっ！」

オレはいらついで、返事をした。  
むぎゆつ、腕に胸を押し付けられる。  
「・・・犯人おるかもしれんのに？」

うるうるお目め（と、胸（にやられて、しびしび付き合つ。

カチャ

トイレのドアが閉まった。

つて、えええええええええつ 何でオレ一緒に入つとるねん！

慌てるオレに、小悪魔様は妖しく微笑んだ。

ジーッ ファスナーを下ろされる。

「な・・・何？何？」

「・・・一回すつきりしたらな・・・頭もすつきりするかもしれんで？」

「へっ！？あつ！やめっ・・・くう・・・ううううう。」

「黙つて。」

「平ちゃんは？」

「さあ・・・トイレちやいますか？」

外から聞こえる刑事の声。

こんなのがばれたら・・・オレ、こいつのオヤジとオレのオヤジに殺やられる！

オレの人生終わってまう！

（和葉つ。和葉つ。もうやめい！）

（ええー何でえ？元気やで？平次のココ。）

いや・・・確かにそうやけどな、気持ちええけどな。  
違ーーーーーうっ

ああ・・・やっぱ、気持ちええ。  
って・・・やーめーてーーーーー！。

やらしく光る和葉の唇。

ちゅぱっ

わざと音を立てて、口から外す。

「はうっ」

快感に思わず、体が震える。

「ほな・・・」

悩ましげな姿態で、抱きつかれる。

(続きは家でな？平次の好きな×××の格好で待つとるから。  
耳元で囁かれる、甘い誘惑。)

ぶほっ

オレは噴出す。

頭に浮かぶのは・・・ピンク色の妄想。

「うおおおおおおお。」

「何や、平ちゃん、鼻息荒うないか？」

「トイレで何か出したんかいな・・・でも、事件解決しそうだから、ええんやないか？ちよお、きもいけど・・・」

・・・事件は電光石火に勢いで解決した。

みながその推理を褒め称えたとき、平次はすでにその場にいなかった。

「和葉ああああ。待つとれやーーーーー!。」

夕日に向かって走る彼の姿は、あちこちで目撃されたという。。。。。

## 事件解決法（後書き）

久々、小悪魔。最初殺人現場にしてたんですが、あまりに不謹慎な  
んで、事件現場にしました（あんま、かわらん？）×××はご想像  
にお任せします（笑）

## 事件解決率

トリックはわかった。

犯人もわかった。

でも、決定的な証拠が・・・

悩むオレの後ろに、和葉がきた。

「わからんのん？」

「いや・・・犯人も手口もわかつとるんやけど。」

「けど？」

「決定的な証拠がな・・・。」

「ないのん。」

「うん。」

「ふーん。」

和葉の目が妖しく光る。

「和葉ちゃん？」

「ねえ。」

ねつとりした視線で絡め取られる。

「・・・ナ、ナニ？」

「犯人、どの人？」

「へっ？」

「容疑者、全員男やから、当然男よな？」

「あ、ああ。まあな。」

「犯人教えて？」

「なんで？」

もの凄く、嫌な予感がするんですけど？

そんなオレを見て、和葉が妖しく笑う。

「アタシが落として見せるわ。どの人？」

・・・予感的中。

「お、落とすって?」

「アンタがいつも、アタシにやられてることやったら、すぐに落ちるんちゃう?」

だああああああつ!

そんなうらやましいこと(もとい、やらしいこと)させられるかあああああ。

「どわああああああつ。」

「何や・・・平ちゃん、気合入ったな。」

「また事件解決しそっやから、いいんちゃう?かなり、鬼気迫ってるけど。」

・・・またもや、事件は解決した。

「・・・和葉ちゃん、平ちゃんに何言ったん?」

「んふふふふ。ナイシヨ。」

和葉がいる場合の、平次の事件解決率は100%。

(おまけ)

「も・・・も、冗談でも、あ、あんなん言っのやめて・・・えぐえぐえぐ。」

「泣かんの。ほら。」

「あっ・・・やっ・・・うっ。」

「気持ちいい？」

「き・・・気持ちいいです。」

「うふふふ。いい子。」

「やっああっああっあぁあぁあぁあぁあっ。」

・・・実はご褒美目当てだったりもする・・・

## 事件解決率（後書き）

事件シリーズ。解決率編。原作でも、しよっちゅう事件現場に連れて行ってるから、こつこつやりとりあったらおもしろいなあと。

## 事件生還率

カタッ

「くっ……和葉……」

「しっ……黙って平次。」

ここは、廃墟ビルの一室。

犯人に追われ、二人逃げ込んだのはいいけど……狭すぎるっ。  
二人ぴったり引っ付かないと入らない。

目の前には、かわいい和葉。

薄い服。

体にぴつとりひつつく、柔らかい肌。

艶やかな唇。

(あっかーーーーーん。)

一箇所に血が集中してまう。

そや！計算しよ！ベクトルやな、ベクトル……

「……って、どこ、手伸ばしてんの？和葉ちゃん？」

「やって、体に何か当たるから、撫でたら、治まるかな思っつて……」

……治まるかい！余計元気になるわっ！

「あわっ。」

「黙って！勘付かれるぞ？」

「……なら、触らんといて……。」

「黙ってって言うんに・・・この口は・・・。」

ぺろっ

舌を絡め取られる。

「あっふっ・・・はあっ。」

「・・・キスでも黙れんの？平チャンは？」

和葉が妖しく笑う。

首に手を回され、もっと激しいキスをされる。  
オレの手も、思わず和葉の胸を触ってしまう。

「ああん。」

「声出さなつて、和葉・・・。」

ああ・・・このシュチエーション、最高！

ガツンっ

犯人がバットで壁を殴りながら、オレたちを探している。

・・・はっ！こんな状況で、オレ達は、なんでいちゃいちゃ

「やばっ・・・和葉、ほんま、こんな時、やめて！」

「ええん？続きしたくないん？」

したいですよ、そりゃ！

音がちよつと遠くなった。

「あ、あっち行ったな、ほんなら、さわりの部分だけ。」

「やつ・・・あつ・・・んんっやめっ。」

ガツンガツン

音がまた近づいてきた。

「ちつまた来たな。」

顔を顰める和葉。

「はあはあはあはあ。」

言葉にならないオレ。

何てハードで気持ちいい・・・いや、何考えてん、オレ！

ガツッ

犯人がそこまで来た。

「もうっ・・・しゃーないなあ。ほいじゃ、はよ、帰って、続きしよ？」

にっこり笑うかわいい和葉。

次の瞬間、真剣な顔を見ると、

バッテリーーンっ。

勢いよく戸を開いた。

突然現れた和葉に、怯む犯人。

そいつ目掛けて、

「うおおおおおおお。」

オレは突進して行った・・・。

「平ちゃん、和葉ちゃん！良かった無事やったんか！」

「おうつ。じゃ、帰るで、和葉！」

「うん」

二人の事件遭遇後の無事生還率100%

事件生還率（後書き）

かわいい平次が書きたくて、書きました。かわいいですか？

## 温泉旅行

服部家と遠山家の温泉旅行。

昼ごはんは、自分達の好きなものを食べようと、地元で有名なレストランに来た。

「うーん。」

真剣にメニューとにらめっこする和葉の姿を、両家の親達が微笑ましそうに見ている。

「和葉ちゃん、何がいいん？」

「ん。」

オレのオカンの問いかけに、生返事する和葉。

ははははは。顔を見合わせて笑う両親達。

視線はみんな和葉に注がれている。

あー．．．一応、オレもいるんやけど．．．ま、いつものことだから、いいか．．．。

オカンがまた和葉に聞いた。

「和葉ちゃん、昨日は何食べたん？」

「ん．．．へいじ．．．」

．．．しーん．．．

いいいい今、なななな、何、言いました？あなた？

「・・・ほう。」

お、おっちゃん、怖いっ。怖いで！

「か、和葉ちゃん？な、何言ってるの？」

慌てふためくオレを殺人的な視線で黙らせると、おっちゃんが聞いた。

「・・・和葉の好物は何やったっけ？」

「んー・・・へいじ・・・。」

まだ、メニューから目を離さず、返事をする和葉。

・・・のはずが、チラッ　メニューに隠れて、俺を見て笑った。

・・・だあああああっ！わざとか！わざとなんか！？

メニューに目を戻した和葉は、ますます確信犯的な笑みを浮かべている。

ひょっとして・・・、あれ、見られた？いや・・・見たんやな！絶対！

青ざめるオレ。

すると、横から、これまた背筋が凍るような低い声が聞こえてきた。

「ほおおおおー。そうか、そうか。じゃ、平ちゃん、後で部屋に来てもらおうか？」

「へっ？」

・・・終わった・・・オレ、いろんな意味で終わった・・・。

昼食後。

温泉に入ったオレは、本当におっちゃんに呼ばれた。

「お、おっちゃん？」

「ふっふっふ。」

「いや、やめっ……おっちゃん、やめてっ……やめてっ……いやっ、あああああああつ。」

……ひっくひっくひっく。

「今日は、これくらいにしといてやる。」

浴衣がはだけて、ひくひく泣くオレを横目で見ながら、おっちゃん  
は、去っていった。

喰われたのは、オレなのに……

ひっく

ただ、温泉あがりの浴衣美人をチラ見しただけなのに……  
ひっくひっく

あんまりや——————。

## 温泉旅行（後書き）

おっちゃんが何したか・・・それは、プロレスです！禁断の関係を想像した方、こんな才子ですみません・・・。

禁断の世界　くありがた迷惑く

「う”……………」

「大丈夫か？和葉？」

「頭痛い……割れそうや……。」

「おい、顔、真っ青やぞ！ほら、おぶってやるから、背中に乗れ。」

「……うん。」

いつもやったら、真っ赤になって抵抗するのに、素直にオレの背中に乗る和葉。

「おばちゃん、家におるん？」

「……今日、平次のおばちゃんと出掛けとる……。」

あ、そやった……。

「どっする？どっちの家に行く？」

「……自分のベッドで寝たい。」

「ほっか。」

和葉の家に行つて、ベッドに寝かせる。

「クスリ、クスリ……あっ！」

そやっ……こないだ東京に行つたときに……

「あつたあつた。」

和葉に口移しで錠剤を飲ませる。

「あっ……。」

「よう効く鎮痛剤や。少し寝とき。」  
「うん。」

しばらくして、和葉の寝息が聞こえてきた。

オレはそっと和葉の額にキスをして、家を後にした。

三時間後、和葉からきたメールは、感謝のメール……ではなく、  
「とつとと、うちに来んかい！このドあほう！」  
「やった……。」

禁断の世界　くありがた迷惑く（後書き）

何がありがた迷惑なのかは・・・次！

禁断の世界　く変わった君く

「か、和葉？ど、どしたん？それ？」

「どしたんじゃないわっ！アンタ、アタシに何飲ませたん！」

いつもよりちよつと甲高い声で叫ぶ和葉。

「いや・・・あんな・・・それより・・・。」

ごくり。

生唾を飲み込む。

これは・・・ちよつと・・・やばい？

オレの目は和葉に釘付けになる。

ベッドにいたのは・・・

和葉のキヤミをしどけなく着て、ぺたりと座りこんだ、10年前の和葉・・・。

・・・か、かわいい・・・けど、やばいつ。

「か、和葉・・・とりあえず、服着ろつ。な？」

「あほかつ。そんなん、あるわけないやろ！」

「あ・・・そか。」

やからって、その格好はやばすぎる。

お好きな人にはたまらんポーズ！

やって、キヤミの肩ひも少しずれとるし！

一年生くらいの割には、異常に色気あるし！

それに、その座り方！  
ばあちゃん座りやけど、お前のそれはやらしーねんっ！

「じゃ、座り方・・・」

「変えれんわっ！」

「なんでえ？」

「あんた、あほちゃう？服がないっちゆうことは、下着もないんやっ！ぼけっ！」

ぶーーーーーっ

あ・・・鼻血出た。

「・・・アンタ・・・ロリコン？」

「・・・いや・・・違うと思う・・・多分。」

鼻を押さえて、上を向くオレを、胡散臭そうな目で見る和葉。

ちらっ。

和葉を見る。

あの薄いキャミの下は・・・つつるの・・・はだ・・・か？

ぶーーーーーっ

「キヤー！アンタ、何なん？もう帰って！自分で何とかするから！」

「生理現象やからしょうがないやないか！って、自分でってどうする気やっ？」

「工藤君と蘭ちゃんに来てもらっから、ええ。」  
携帯を取り出す和葉。

こんなおいしい・・・いや、非常時に、他人タリを呼ぶなんて、んなこた

「させんぞおーいーいー和葉っ。」

「いや．．止まる。止めてみせる。ちょお待て！ほら、止まった。」  
気合で鼻血を止めたオレを和葉は、ますます、どんびきした顔で見た。

「アンタ．．．何考えてるん？」

「いやいや、和葉ちゃんのことだけで。えっへっへっ。」

「．．．やっぱ、工藤君呼ば。」

「だめやって。」

ちゅっ

和葉に軽くキスをする。

「さあ、二人で今後のことを考えよう！」

「あほーいーいーいー。」

目の前は、オレの超好みの和葉。  
しかも、ちんまい。

．．．ふっふっふ。光源氏の気持ちがわかるで．．．今のオレには．．．

妖しい妄想で、頭がふやけていたオレは忘れていた．．．。  
中身は、あの、和葉やってことを．．．。

禁断の世界　く変わった君く（後書き）

光源氏はそんなエロくないと思う・・・いや、一緒か？

禁断の世界 〱 罫

「あつ……やめつ……。」

「へええ。体はちんまくても、感じるんやな……。」

キャミの隙間から、体にキスを落としながら、関心するオレ。

キャミは脱がさんのが、乙やな。

このちらりがまた……ぐふふ。

和葉がばたばたしてたけど、ちび和葉の抵抗なんて、痛くもかゆくもない。

オレは、ますます、和葉に悪戯をする。

「もう……やめてえな。平次……。」

まっかな顔して、潤んだ瞳でオレを見上げる和葉。

やばい……。このシュチエーションはやばい。

とん。

和葉を軽く倒して、うつ伏せにする。

「やつ」

「背中……相変わらずキレイやなあ。」

べろっ。背中から首筋を舐め上げる。

「ひゃんっ。」

「……ぐふふ……。」

「やあん。やめてっ……へいじい。」

「……ああ、もう堪らん……。」

耳たぶを噛みながら、キャミの中に後ろから手を入れた瞬間……

あの音が・・・

カチッ

・・・何で？その機能はちっさくなっても、ついてんの？

くるん。

和葉が仰向けになる。

幼い顔に、妖艶な笑み。

くーーーーー！。た、堪らん・・・

っーっ

オレの頬を指で撫でる。

「このアタシを好きにしたいん？」

「えっ・・・いや・・・」

「抵抗された方が萌えるん？」

「あ・・・まあ・・・」

何で、素直に答えてんの？オレ？

「ふーん・・・じゃ、アタシを好きにして、ええで？平次兄ちゃん？」

「~~~~~っ／／／／／／／／／／／／／／／」

・・・堕ちた。堕ちたオレ・・・

「和葉あああああつ。」

オレは和葉の畷に嵌ってしまった・・・。

禁断の世界　く　罫　く　（後書き）

しよせん、和葉には勝てないってことで・・・。

禁断の世界　↳逆転

「あん・・・やめっ・・・」

「ここ、イヤか？」

「・・・イヤやないけど・・・んっ・・・」

「けど？」

「・・・恥ずかしいねん・・・平次兄ちゃん・・・。」

くーーーーーっ。

堪らん。

この禁断な感じが堪らん。

「和葉・・・。」

調子に乗ったオレは、下半身に手を伸ばそうとして、叩かれた。

「だめ。」

「えっ！？何で？」

「アタシ、まだ七歳やもん。」

「へっ？」

「やから・・・。」

呆然としていたオレは、簡単に倒される。

「今度は、アタシの番やな・・・平次兄ちゃん？」

和葉はにっこり笑うと、オレの上に乗った。

「か、和葉？」

「アタシ、よくわからんから、教えてな？平次兄ちゃん？」

・・・って、嘘つくなっ！お前！

「はあっ・・・うっ・・・。」  
「気持ちええん？お兄ちゃん。」  
「あっ・・・うん。」

ちろちろちろちろ

和葉の小さい舌が、オレの感じるところを、ピンポイントで突いてくる。

「ああっ！ああああっ。」  
「あはははっ。お兄ちゃん、声大っきい。」  
「その呼び方、ええけど・・・できれば、やめてえな・・・。」  
「どしてえ？」  
「倒錯の世界に行つてまいそう・・・。」  
「ふふふふ。難しうて、わからんわ・・・お・に・い・ちや・ん？」  
「あっ。くっ・・・んっ。ああああっ。」

ますます、和葉の動きが妖しくなる。

ちゅぽっ。

「か、和葉？」  
ちいんまい口に、オレのアレが・・・  
「お口に、入らんわ・・・。」  
上目遣いにオレを見ながら、ちろちろっと・・・

だあああああっ！やーめーてー！

ひっく・・・えぐえぐえぐ。

「早かったなあ。」

「ひっく・・・言わんでえな。」

「最短記録なんやないん？」

「言うなって！」

「ま、楽しめたから、良かったな？」

「ようないわっ！」

小学生の和葉に……。ものの数秒でやられて……

ひっくひっくひっく

オレは、ベッドに泣き伏した……。

「オレ……情けな……。」

「元々やる？」

和葉は髪を手入れしながら、ふつと鼻で笑った……。

禁断の世界　↳逆転↳（後書き）

倒錯の世界でした・・・。

## 禁断の世界　く種明かし

「オ、オレ……情けな……」

「何を今さら……。」

まだ泣くオレに、和葉は呆れた顔をしている。

オレはあっさり、小学生の小悪魔和葉にやられてしまった。

だって、気持ちよかったんだもん……って違ーーーーーうっ！

「それに、お前っ！」

オレは和葉をびしっと指差した。

「何で、もう、元に戻つとんのやつ！お前、すぐ戻るって知つたなな！」

指の先には、しらーっとしてオレを見る、でか和葉。

「知つとつたで？体に異変が起こって、すぐ、志保ちゃんに電話したもん。アンタ、勝手に志保ちゃんのクスリくすねたんやつてなあ。志保ちゃん気付いとつたんやて。で、懲らしめようと思って黙つとつたて。やから、お仕置き、お願いって頼まれてな。」

しらっとして、でか和葉は言う。

「お仕置きって……くすねたんちゃう！貰うたんやつ！」

「何も言わずに取つたら、くすねた言いますっ！」

「うーーーーー！」

……この間東京に行ったとき……

強烈な頭痛に襲われたオレは、元ちっこいねーちゃんから、鎮痛剤

を貰った。

それが、あんまりにもよく効いたんで、もつと、もらつて。と思つて、そこらへんのクスリを頂戴し、それを和葉に……

「アンタが悪い。」

「あい。」

「もう、懲りた？」

「……あい。」

「で、クスリは？どうせ、ごちゃごちゃにして、持ってきたんやろ？」

「……うん。」

「あん中な、まだ二つ、このちっこくなるクスリがあるらしいんや。」

「

「まじで!？」

「うん……。やからな？」

和葉がにやつと笑った。

オレはとっさに身構える。

「毎日一錠ずつ、アンタ飲み。」

「はあっ？」

「そして、当たったら……」

「当たったら？」

「アタシがかわいがつてやるで？骨の髄までな……。」

「いややーーーーー。」

……オレが、この後、すぐさま郵便局に行き、速達で元ちっこいねえちゃんにクスリを送つたのは言つまでもない。

こゝ、怖かつた……。ちよつと……。弄られてみたかつたけど……。つて、大丈夫か？オレ……

でもでも……。ちっこい和葉はかわいかつた……。うん。

クスリ・・・もらっとけば・・・いやいや・・・

・・・今日が楽しかったと思うオレは、終わってるんやろか・・・  
神さん・・・。

禁断の世界 〵種明かし〵 (後書き)

禁断シリーズはこれで終わりです。クスリ・・・ギャグに使って  
みません・・・。

「蘭ちゃんと青子ちゃんがな〜」

「……うん。」

「ってな、ロマンチックなデートしたんやて。」

「……うん。」

「って、アンタ、聞いてないやろっ!」

「……うん。って、どわっ!」

……何で、小悪魔全開なんですか？アナタ？

「……そんなに、お仕置きされたいん？」

「やめっ。和葉やめてっ。あっ……そんなとこ……あっ……

ああああっ。」

ひっくひっくひっく

「お前らのせいやっ。」

「言いがかりはよせ。バカ。」

「そうだよー。自分が和葉ちゃんの話聞いてなかったからでしょ？」

双子のような二人が超冷たい目でオレを見ている。

「そっやないっ!」

「何が？」

「お前らが、きざなことばっかするから、オレにとばっちりがくるんやっ!」

「和葉ちゃんがしてほしいんだったら、やってやればいいじゃん。」

「そっそっ。」

「できるか、んなこと。鳥肌立つわっ。」

オレが怒鳴ると、黒羽がにやっとして、聞いてきた。

「で？お仕置き何だったの？」

「・・・言わん。」

「言えんの間違いだろ。」

そう冷たく突っ込むのは、工藤。

そりゃそうなんやげどな。言わんでくれ・・・。

「うひょー。今回もすごそうだね。」

「・・・面白がるなや。黒羽。」

「いやいや。面白がってるけどさ。」

「面白がってるんかい！」

「でもさ、青子は妖精って感じたからさ、小悪魔が想像つかないんだけど。蘭ちゃんは天使だよなあ・・・工藤は想像つく？」

「・・・俺は一回やられた。」

「えっ！？マジ？」

「・・・マジ。」

「ど、どうだった？」

「・・・言わねえ。」

「言えねえの間違いやろ？ものの数秒で、両手両足に手錠掛けられたやん。」

「・・・（怒）」

「すごいな・・・それ。」

「・・・興味持つなよ。黒羽。いくらオメーでも、あの目には敵わねえ。」

「ぶーーーーん。」

黒羽が面白そうな顔をしている。

・・・嫌な予感がする。

「・・・何があっても、オレは知らんぞ。」  
「何のこと？」

・・・本当に知らんからな。

VS黒羽 1 (後書き)

興味津々の黒羽君。工藤が手錠かけられたのは、和葉らぶで書きま  
した。

VS 黒羽 2 (前書き)

快斗サイド

VS 黒羽 2

そうは言われたものの……。  
持ち前の好奇心は、非常にくすぐられた訳で。

俺は、今、服部に変装して、和葉ちゃんの前にいる。

「和葉。」

「どしたん？平次。」

きよとんとした顔で、俺を見る和葉ちゃん。

こうして見ると、ただの美少女なんだけどなあ。

凝視する俺を不思議に思ったのか、和葉ちゃんが俺の頬に触れてきた。

「ほんまに、どうし……。」

そう言って、手を止める。

カチッ

……ナニ？今の音。

和葉ちゃんの目が妖艶に光る。

「……ふーん。」

「か、和葉？」

「そんなに、いたぶられたいんや。」

「えっ!?(いきなり、何でそうなるの!?)」

「いいで?おいで……。」

「……(どこに!?)」

・・・気付いたら、ベッドの上・・・

「ちよつ、ちよつと待て！和葉ちゃん！」

「素に戻ってるで？く・ろ・は・く・ん？」

「えっ・・・気付いて・・・」

「まあな。で？興味あるんやろ？」

「いや・・・興味あるっていうか・・・あっちよつと、どこ触って・・・」

「うふふふ。青子ちゃんには黙つといてあげるな。」

「いや・・・そういう問題では、なくて・・・あっやめっんっ。」

「ふふふ。黒羽君、かわいいなあ。」

「あっ、やめっ、まじで・・・ちよつやっあっあんっ。」

「うふふふふ。」

「ああっああ！あんっああっ！やめてっ・・・あああっ。」

・・・

「・・・で、どうだったんだよ。」

「ひっく・・・言いたくない。」

「だから、やめとけって言ったのに。」

「あんなに、すごいとは思わなかったんだ！」

「・・・くせになる？」

「なりそう・・・って言わせるな！」

「大丈夫かよ・・・オメー・・・。」

「・・・なあ、工藤。」

「何だよ。」

「・・・青子が小悪魔になったらどうしよ・・・」

「妖精は小悪魔にならねえよ。」

「そ、そうだよな！な！」

「ああ。小悪魔は一人で充分だ……。」

工藤はそう言っつて、遠くを見た。

俺もそう思っつ……。

「ところで、お前、服部にはれたら、殺されるぞ。」

「……それも、黙って下さい。」

うっつ。服部、青子、ゴメンよ。

でもでも……とっつても、良かった……

っつて、何言っつてるんだ！俺！

……でも。もう一回くらい……と思っつてる俺もいて……

……だめだ……俺……

……ちなみに、服部にはバレませんでした……。

VS 黒羽 2 (後書き)

ちなみに、快斗も和葉も服着たままです。そこは、和葉はしっかりしています(どこが?)

## 電車の中で

ガタンゴトン。電車は揺れる。

休日夕方の電車はほぼ満員状態。

オレの目の前には、オレのシャツを掴んで立つ、ちよつと不機嫌な和葉。

何とかスペースを作って、そこに困い込むようにしてるんやけど・

「・・・混んどるな。」

「この時間やもん。当たり前やろ。」

「そうやな・・・はははは。」

「・・・」

オレの乾いた笑いを丸無視して、和葉はぶいっと横を向き、窓の外の流れる景色を見ている。

あかーん・・・さらに機嫌が悪うなつとる。

オレはがっくり頭を垂れた。

・・・今日は久々のデートの予定やった。

が、案の定(?)、事件が入り、すぐに終わるからと、嫌がる和葉を宥めすかして、事件現場に連れて行き・・・

で、今の時間。

(今日は何やったっけ?「ショッピングとおいしいもの食べよ。」

やったな。それが血まみれの事件現場・・・そりゃ怒るわな・・・

)

ガタン。

電車がまた揺れた。

和葉の柔らかい体がオレに寄りかかり・・・

9月になったとはいえ、和葉はまだまだ薄着していて・・・

胸・・・胸があ。

やばい。

この体勢は非常にやばい。

ああ・・・でも、気持ちええ・・・。

「平次・・・。」

恍惚としていると、和葉からしゃべりかけられた。

「何や。」

和葉がオレの胸に顔をつけている。

「・・・恥ずかしい。」

あ・・・気付いた？やっぱり。

「やってお前が・・・。」

そこまで言って、オレは息を飲んだ。

和葉が顔を真っ赤にして、潤んだ瞳でオレを見上げている。

(か、かわええ・・・。)

オレのあらぬところが、ますます元気になり・・・

「へ、平次・・・。」

「黙れって。」

いかん、いかん。平常心、平常心。

えっと・・・

「・・・昨日のことでも考えてん。」  
和葉が囁く。

そやな、昨日は・・・和葉と学校行って、ほいで、放課後盛り上がって、教室で・・・いやーよかったわ。アレは。

・・・って、あかんやんけ！ますます元気になってもったわ。

「・・・夜は？」

また悪魔の囁きが・・・。

えっと、夜は、和葉がメシ食いにきて、ほいで、オレの部屋でまた盛り上がって、声を殺す和葉がまた、かわゆうて・・・

・・・余計元気になったわ。ぼけっ。

「・・・お前わざとやな。」

「何がなん？」

ジト目で睨むオレを、和葉がきよんとした顔で見上げている。

(こ、この顔もかわええ。)

ガタン

電車がカーブに差し掛かった。

「きやつ。」

何も持っていない和葉がオレにしがみ付く。

・・・もうだめや。治まらん。

「・・・次で降りてええ？」

「えっ・・・やつ。駅、もうすぐやん。お家帰ろ？な？」

囁くな。顔赤らめるな。首傾げるな。どんだけ、かわいいねん！お前！

心の中で悶えるオレに気が付かないのか、和葉はますます体を密着させて・・・

しかも、オレの下半身のせいで居心地が悪いのか、もぞもぞ和葉が動く。

「動くなつて。」

「えっ。やつ。どしたん？ほんとに。」

天国か？こりゃ、地獄か？

和葉はかわいいし、オレの分身はますます元気になるし。駅までの10分が長いこと長いこと。

「・・・大丈夫？平次。」

駅について、へたり込んだオレの背中を和葉がさする。

「・・・大丈夫やない。」

顔を上げると、和葉の胸の谷間が・・・。

慌てて下を向くと、ミニスカートからちらつと見える白い太もも・・・。

「・・・だめや。」

「ほんと、どしたん？」

「立てん。」

ほんま、何の罰ゲームやねん。コレ・・・。

ふっ。ふいに耳元に息を吹きかけられた。

「ひゃいつ。」

「んふふふ。辛かった？密着プレイ。」

・・・プレイですか？そうですか・・・

「って、お前、わざと・・・。」

和葉の顔を見て、愕然とした。

・・・いつから、そっちの和葉になってたの？

「気付かんかった・・・。」

うな垂れるオレに構いもせず、

「さてと。」

和葉がオレに色々見せ付けるように、色っぽく立ち上がった。

「さ、お家帰ろ？平次。」

ふふふ。和葉が妖しく笑いながら、歩き始める。

これ見よがしに、ぷりぷり揺れるお尻がまた・・・

・・・う”。。。オレ、いつ立ち上がれるんや？

「平次、置いていくで？」

「・・・今行く。」

オレ、そんなに悪いことしたか？

なあ、和葉・・・。

夕日がひたすら眩しかった・・・。くすん。

電車の中で（後書き）

電車の中で。無意識風プレイにやられた平ちゃんです。

終わりの始まり(前書き)

和葉・平次、京都 大阪で遠距離恋愛中。

## 終わりの始まり

「もーアンタなんかいらん。」

目の前には、オレを冷たく見据える幼馴染の顔。

「か、和葉？何を……。」

パシッ

思わず手を伸ばしたオレの手を、無常にもはねつける。

「触らんといて。アンタとはもうやってけん。」

「はっ！？ちよっ……へっ？」

「今日という今日は、アンタに愛想尽かした。終わりや、アタシら。」

「ちよ、ま、待て！和葉！」

後ろを向いた和葉の肩を不用意に掴んで、放り投げられる。

「うわっ！」

「触らんといてって言ったやろっ！アンタはアンタでもう好きにすればええ。夢子とでも何でも、乳繰り合っとき！」

「ゆ、夢子って……和葉っ、おいっ……うげっ。」

立ち上がりかけたオレの腹に、渾身の蹴りを入れて、オレの最愛の女は振り向きもせず、去っていった。

……遠距離恋愛を始めて半年。

オレと和葉は今日、幼馴染でも何でも無い、赤の他人になった……

終わりの始まり（後書き）

平次振られる

## 後悔先立たず

「はぁ……。」

携帯画面を見て、ため息をつく。

そこには、仲良く写った二人の姿。

あの日……。

数日後には機嫌が直っているだろうと、軽く考えていたオレは、本当に手酷い目に遭った。

謝ろうとかけた電話は繋がらず、慌てて行った和葉の家には、和葉はおらず。

しかも、一人暮らしを始めていて、引越し先すら教えてもらえなかった。

オレと和葉を繋いでいたものは、こんなにももろかった。

今でもあの時のことを後悔する。

何で、すぐにおっかけなかったのか。

何で、すぐに弁明しなかったのか。

いつでも仲直りができると思っていた。

それが当たり前ではないと気付いた時には、もう和葉はオレの隣にはいなかった……。

後悔先立たず（後書き）

後悔平ちゃん

## 理由(わけ)

「服部君。」

甘ったるい声が聞こえて、オレは振り向いた。

そこには……

今回の騒動を作った夢子(注：和葉命名。名前なんかオレ、知らん。)

「何や？」

「お昼まだでしょ？一緒に食べよ？お弁当作ってきたんだ。」

首をかしげて微笑む夢子。

この笑顔がかわいいと、ときめいた事もあったのに……  
今は何とも思えない。

「いらん。」

「えー。どうして。」

軽い感じで、体に触れられる。

……鬱陶しい。

「……頼むからあっち行ってくれんか。」

やばっ。きつう言つてもうた！

慌てた時には、女の顔がゆがんでいた。

「わたし……、服部君がお腹すいてると思って……。」

「すまん。空いとらんから、ほんまにすまん。」

オレは軽く手を挙げて、その場を去った。

歩きながら、すっかり色づいた街路樹を見上げる。

そっぴや、和葉、ここの紅葉を見ながら一緒に歩くのを楽しみにし  
とったなあ。

「綺麗やろうなあ。」

うっとりとして言った、和葉の声も表情もありありと思い出されて、  
胸が冷たくなる。

……和葉がオレを見限った理由。

それは、オレの心のよそ見。

清纯な夢子にちょっとくらっときたのを、和葉に見破られた。

本当にただのよそ見だった。

和葉以外に本気になるはずがなかった。

今までみたいに一緒にいれば、ここまで拗れなかったのに。

距離がオレらの邪魔をした。

「……オレはお前だけが好きなんやで。」

今でも……今までも。

それを伝えたくても、お前はもういない……。

オレは一人寂しく歩き続けた。

理由(わけ)(後書き)

急に寒くなったので・・・秋だけにしんみりと。でも、コレ、基本ギャグですから！

## 和葉の彼氏

ずっとオレの左隣にいた存在。

物理的に離れていても、常に傍にいる感覚があった。

なのに……。

あの日以来、和葉の気配が感じられない。

その代わり

「服部君。」

オレの隣には、何故か夢子が……（まだ、名前知らん。興味ないから。）

（ふふふ。へえじ）

夢の中ではいつでも和葉に会えるのに。

今、アイツが何をしているのか、オレは知らない。

和葉……お前に会いたい。

「おい、服部。」

大学のコンパの時、和葉のことで物思いにふけていたら、高校時代の同級生に声をかけられた。

「何や？」

「お前、ほんとーに遠山と別れたんやな。」

「……聞くなや。何で今さらそんなこと言っんや。」

「いや、遠山と彼氏の姿見たんや。昨日。」

パリン

手に持っていたグラスが割れた。

「キヤーツ、服部君！大丈夫！」

騒ぐ夢子の声が聞こえたが、そんなこと関係ない。

・・・和葉に彼氏？

「・・・何やて？」

自分でも驚くほどの低い声が出た。

「誰やつ！相手は！」

オレの剣幕に同級生が怯え始めた。

「い、いや、オレ、知らんし。でも、大人のええ男やったで。仲良  
さげやったし。」

「ああ！？何やと、コラ。もう一遍言ってみい！」

「アンタ、アホちゃう？和葉あんだだけかわいいんやで？男がほつと  
くわけないやん！」

今にも暴れ出しそうなオレに対して、後ろから飛んできた、辛らつ  
な言葉。

「お前つ・・・って、アレ？誰やったつけ？」

振り向いた先には、美人系の気の強そうな女。

どっかで見たことあるような・・・。

オレのとぼけた顔を見て、その女はため息をつく、話始めた。

「神崎・・・高校一年の時、一緒のクラスやったけどな。ちなみに  
今も隣のクラスやつ！アンタ本当に和葉以外興味ないんやね。」

「す、すまん。で、神崎？サン。和葉の彼氏って誰やつ！」

「知らん。でも、京都の人で、年上らしいで。」

「・・・京都？年上？」

顎に手を当てて、考え込む。

誰や・・・？年上？ええ男？京都におる？

そんなオレの姿を見て、神崎がにやりと笑った。

「ふーん。そこの何枚か皮かぶってそうな女に乗り換えたって  
聞いたってたけど、和葉のことはまだ気になるんやね。」

・・・乗り換えた？

「へっ？」

「何やの？その間抜けな顔は。その女が自慢げに言いよったで？」  
自分が原因で二人が別れた。服部平次は私を選んだ。』ってな。」

・・・何やそれ？

「原因は原因かもしれんけど・・・和葉が勝手に勘違いしただけで、  
オレ、和葉だけやで？」  
今でも、今までも。

「ふーん。和葉はそう思っとらんで？延々、惚気聞かされたらしい  
からな。その女に。」

神崎が顎でしゃくった先には、震える夢子。

「惚気って何や？おい。」

「わ、私、知らない！あ、あなた、何言って・・・。」

「ふんつ。この際やから、はっきり言わしてもらっけどな。和葉は、  
アンタになんか負ける女やない。ただ、アンタの本性も見抜けんと  
鼻の下伸ばしとった服部に愛想尽かしただけなんやっ。」

「そうそう。オレ、夢子のことなんか、何とも思っとならんし。勘違

いすんなや。」

「……私……夢子じゃないんですけど。」

「あ、すまん、すまん。名前知らんからな。」

あっけらかんと言ったオレに、夢子は泣き出した。

「すまんって。で、和葉のことやけど。」

「あんた……。」

オレをジト目で睨む神崎。

「和葉のこと以外は、ほんとーにどうでもええんやね。」

「まあな、で、和葉の彼氏って……。」

さらに神崎に聞き出そうとした瞬間、周りがざわつき始めた。

「遠山やつ!」

皆が見つめる先に視線を移すと、黒いコートに身を包んだ背の高い男に腰を引き寄せられた和葉の姿があった……。

和葉の彼氏（後書き）

和葉の彼氏登場

## あつけない結末

「和葉っ！」

オレは力一杯叫んだ。

「和葉っ和葉っ和葉っ！」

道路脇に停めてあった、ぼろぼろのベンツに向かっていた和葉がゆつくりと振り向いた。

「……平次。」

和葉の腰に手を当てていた男も振り向く。そしてオレを見て、肩眉を上げた。

……ほんまにええ男や。

こいつが和葉の男……。

「……和葉返せや。」

オレはそいつの目を睨みつけて言った。

「返すも何も。」

男は嫌みつたらしく笑いながら、和葉の腰に当てていた手を挙げる。すると、車の向こう側から、楽しげな声が聞こえてきた。

「タイムアップ！残念やったな、火村。」

声がした方を見ると、車の上に頬杖ついて、にこにこ笑っている男がいた。

「そりゃ、お前だろ。アリス。」

「あはは。そうやな。」

・・・こいつも案外ええ男・・・

で、どっちが、和葉の男や!?

男達を交互に睨みつける。

「そんな目したら、ええ男が台無しやで? 服部平次君。」  
車に頬杖付いた男が、楽しそうに笑った。

「なんやと〜〜(怒)」

「あはははは。そやなあ。」

つて、何でお前まで笑つとんの? 和葉サン?

和葉の笑顔に毒気を抜かれていると、和葉が、笑いながら男達に手を挙げた。

「ほな、アタシ帰るな。」

「ああ、また何かあつたら連絡しろ。」

「またな、和葉ちゃん。」

「うん。」

さっくりと別れて、男達は車へ、和葉はこっちへ向かって来る。

「来るのが、遅い!」

「す、すまん。・・・けど、和葉、あいつら・・・。何?」

「ああ、アンタも会ったことあるはずやけどな。作家さんと大学の准教授さんや。」

「ああああああ！見たことある！・・・で、何でお前とおるねん！」  
「さあな。ところで、何で別れた女を返せとか言っくんかな？服部君は？」

和葉がオレの顎を指で持ち上げて、挑戦的な笑みを浮かべる。

「すみません。和葉さん。」

「何が？」

「オレにはお前だけやねん。これまでも、これからも。」

「で？」

「夢子の本性わかりました。すみません。オレとやり直してください。」

「もう、清纯派にすぐメロメロならん？」

「なりません。多分。」

「そ。」

そっけなく返事をする、和葉がすたすた歩き出した。

「か、和葉？」

「ほな、帰ろうか。平次。」

そう言って笑った和葉は、今までで一番妖艶で美しかった。

あつけない結末（後書き）

和葉といた人たちは、某小説の小説家と犯罪社会学の先生。誰だかわかりますか（笑）？やけになって遊んでいた和葉を守っていませんでした。

## 帰る場所

「んっ……あっ。」

ここはビルの路地裏。

一緒に帰っていて、もう、どうにもこうにも堪らず、和葉を引っ張り込んだ。

「も……平次、落ち着いてえな……。」

「無理。」

「あぁっ……んんっ。」

夢中で和葉の唇を舐る。

ああ。最高……。やっぱりオレにはお前しかおらん！

「もう……な？家に帰ろ？」

「まだ……。」

「ううんっあっあんっ。もう平次い……後で、じっくりいたぶつたるから。」

「……はい？」

……何か今、変な単語聞こえんかったか？

まじまじと和葉の顔を見る。

あ、あっちの和葉になっとる……。

「心のよそ見の代償は高うつくで？楽しみやな。へ・い・ちゃ・ん



おまけ。

「お前、あの男達と何もなかったんやろうな？」

「ふふふ。もちろん。あつたで？」

「何やと~~~~~!!」

「別れてた間やから、アンタに文句言われる筋合いあ・り・ま・せ・ん！」

「それでも・・・何やもう・・・。」

「大丈夫！アタシ、平次以外に好きな人できんから。」

「ほうか・・・でもなあ・・・ぶちぶち。」

「そうそう。平次、”なぶる”って漢字かける？」

「何や急に。」

「男に女が挟まれて『髑』。よくできると思わん？この漢字。」

「かかか、和葉、おおおおお前、ななな何やってきた？」

「覗いてみる？めくるめく大人のせ・か・い。」

「いやややや~~~~~!!」。

「あははははは。」

帰る場所（後書き）

もちろん、平次はおちよくらわれています。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8538v/>

---

小悪魔和葉ちゃん

2011年10月10日11時26分発行